はじめに

この冊子は、都立戸山高校の一九六二年卒同期生（一九四三、四四年生まれ）の有志が中心となって、筆者たちがものごころついた一九四七年ころ以降の記憶を集め、また戦争中のことについては両親や知人たちから聞いて記録したものです。

戦争の体験と言うと戦場での悲惨さが語られることが多いのですが、この文集に出てくるものは戦場とは遠く離れたところでの記録が主です。戦場以外で、戦場から遠く離れた家族たちにとってもこれほどの悲劇だったという記録として、いままで誰にも言わなかったことを思い切って書いたものです。お互いに親しい友が初めて書いた経験を読んで、しばらくは何も言えませんでした。

もう一つ大事なことは、ここに書く時代の数十年前から一九四五年まで、日本が韓国や中国、東南アジアの多くの国に攻め込んで、近隣の国々のひとびとに残虐な行いをし、ここに書くこととは比較できないほどの悲惨な目に合わせてしまったという歴史上の事実です。戦争反対の理由は、自分たちが苦しい目にあうからだけではありません。ふたたびこのような状況を作らないように、という思いからこの冊子を作りました。ご一読いただければ幸いです。

編集責任者　狐崎　晶雄

（参考）文中にいくつか「『若いみなさんへ』の文」あるいは「Kさんのメモ」と出てきますが、これは編集責任者（狐崎）がこの文集を作ろうと提案した時に、自分の体験とともに一九四五年までの戦争に関する情報と感想を若いみなさんに向けた文として書いたものです。http://www.geocities.jp/hoshikuzu2016/

目次

はじめに　秋山英行　5
父の生き方に今思う　井伊直允　11
上下座する元上官　石井延洋　15
呉から石井へ　石田郁子　17
疎開　石原邦雄　22
戦時体験・戦後体験――私の場合　伊東秀子　28
日中戦争と戦犯だった父の戦後
「花子とアン」の空襲のとき我が家も　薄井　敬　37
「鶴」を歌うと…　遠藤久子　40
大連生まれの私と周囲の人々　大場淑子　43
「引揚難民」　大森邦彦　53
身近かに見聞きした戦中・戦後　菅野尚子　57
人さらい　狐崎晶雄　64
戦後七〇年に考える――かつてアジアで唯一植民地支配をした　木村宏一郎　70
教会での話　久保田武美　74
インパール作戦に参加した叔父の話――戦中戦後の我が家の話を含め　小泉秀夫　76
「国家のために死ぬ」という論理納得できず――父の遺した考察、今よみがえる　小島祥一　81
鬼畜米英に載る母子像　小宮山昭　86
「敗戦」の風景　澤井洋紀　89
焼け跡と憲法に育てられた人生　高原伸夫　93
往時を偲び現代日本を憂う　竹村紘一　98
暴走を止めるのは一人の勇気　外山悠々　103
ミズーリ号　中原式子　107

ある地方都市の戦後　成澤　秀　112
その子、どこの子だい？　平野卿子　114
私の戦後七〇年　藤岡武義　119
戦争が遺した名前　水野加南　123
戦争のもたらすもの
——被害と加害を見つめて　三井斌友　126
ミンダナオ島で死線をくぐりぬけた父　宮後康恒　132
私の太平洋戦争　柳澤　務　134
貧しかった子供の頃　横澤喜久子　143
いま、父を思えば　横山友子　150
そっと忍びよる戦争　和多田雅子　154
私の戦後史　和田正武　157
あとがき・編集後記

（装幀・レイアウト／澤井洋紀）

父の生き方に今思う

秋山　英行

私が生まれたのは昭和一八年六月でしたので昭和二〇年八月の終戦の時や終戦直後の二、三年まではほとんど記憶に残っておりません。ただ二〇年の初めに父の田舎の宮城県登米市に疎開し叔母の家に母と妹三人でお世話になったことがわずかに記憶に残っております。二二年に台風により北上川が氾濫して叔父におんぶされ川を歩いたことがわずかに思い出されます。そして二三年九月に父が東京より我々を引き取りに登米市に来て、東京の笹塚の小さな家に引き上げてきた頃から記憶がだんだんとはっきりしてきました。

職業軍人の父

この時代の事を思い出すにはやはり父の事を書かねばなりません。父秋山穂積は明治四五年宮城県登米市の貧しい村の家の次男として生まれました。秋山家はその昔豪農でしたが事業に失敗し父が生まれたころは貧しい農家になっておりました。父は小さい時よりよく勉強をして中学卒業後第二高等学校（現東北大学）に受かりましたが、お金が無いので入学をあきらめました。それを見てふびんに思った中学の校長が書生として仙台に呼び東北大の医学部に行くよう浪人をさせました。しかしながらお金が無いので東北大を受けるのを断念し、逆にお金がもらえる陸軍士官学校をうけ無事に合格しました。支給されたお金を実家に仕送り

二つの遺品　名倉壽子　109
ある地方都市の戦後　成澤　秀　112
その子、どこの子だい？　平野卿子　114
私の戦後七〇年　藤岡武義　119
戦争が遺した名前　水野加南　123
戦争のもたらすもの
——被害と加害を見つめて　三井斌友　126
ミンダナオ島で死線をくぐりぬけた父　宮後康恒　132
私の太平洋戦争　柳澤　務　134
貧しかった子供の頃　横澤喜久子　143
いま、父を思えば　横山友子　150
そっと忍びよる戦争　和多田雅子　154
私の戦後史　和田正武　157
あとがき・編集後記

（装幀・レイアウト／澤井洋紀）

父の生き方に今思う

秋山　英行

私が生まれたのは昭和一八年六月でしたので昭和二〇年八月の終戦の時や終戦直後の一、三年まではほとんど記憶に残っておりません。ただ二〇年の初めに父の田舎の宮城県登米市に疎開し叔母の家に母と妹三人でお世話になったことがわずかに記憶に残っております。二二年に台風により北上川が氾濫して叔父におんぶされ川を歩いたことがわずかに思い出されます。そして二三年九月に父が東京より我々を引き取りに登米市に来て、東京の笹塚の小さな家に引き上げてきた頃から記憶がだんだんとはっきりしてきました。

職業軍人の父

この時代の事を思い出すにはやはり父の事を書かねばなりません。父秋山穂積は明治四五年宮城県登米市の貧しい村の家の次男として生まれました。秋山家はその昔豪農でしたが事業に失敗し父が生まれたころは貧しい農家になっておりました。父は小さい時よりよく勉強をして中学卒業後第二高等学校（現東北大学）に受かりましたが、お金が無いので入学をあきらめました。それを見てふびんに思った中学の校長が書生として仙台に呼び東北大の医学部に行くよう浪人をさせました。しかしながらお金が無いので東北大を受けるのを断念し、逆にお金がもらえる陸軍士官学校をうけ無事に合格しました。支給されたお金を実家に仕送り

をしました。陸軍士官学校四八期生です。卒業後は航空隊に所属し満州牡丹江部隊にいました。多分そのままいましたら例の〝ノモンハン事件〟で戦死したと思います。しかし運があったのかノモンハン事件一年前に父は結核にかかり、広島の江田島の海軍兵学校に療養のために来ました。そこで上司の紹介で母と結婚しました。その後千葉県の下志津飛行学校の教官になり千葉県四街道に住みました。それ故私は千葉県で生まれました。二〇年二月に生まれた妹は飛行学校の名前をとり志津子とつけました。

戦後の父

父は戦争前は職業軍人で（最後は少佐）戦後は白八十度価値観が変わった世界に投げ出されました。半分ぐらいの元軍人はこの大変化した世の中についていけず、没落したり、病にかかり死んでいきました。父は意志が強かったのか、鈍感なのかわかりませんがこの大変化した世の中に順応することが出来ました。頭を切り替え日本鋼管にいれてもらい就職しました。そして東京で落ちついた二三年に疎開先の宮城県登米市に来て母、私、妹を東京に連れて戻りました。この辺から私の記憶もだんだんと鮮明になってきました。

父は日本鋼管からすぐに子会社に派遣され、今にも潰れそうな会社の経営に参加して、我々家族は何時も〝潰れる、潰れる〟と脅かされ本当に暗い毎日でした。本当に父は戦争前の事はほとんど何も言わず毎日、毎日を過ごすことが目的で仕事に没頭しておりました。私の後で生まれた弟を入れ家族五人でどこかに連れて行ってもらった楽しいことはほとんど記憶にありませんでした。子供の面倒はほとんど母が見ており、父は仕事一本で休みは家でごろごろしておりました。子供は官立の学校を出て将来は役人になる事を望んでおりました。やはり自分が勤めておる会社が潰れる心配に悩まされ子供もそのような環境にしたくなかったためだと思います。

さて宮城県登米市からの疎開から東京に家族五人で住むようになってからは段々と当時の記憶が蘇えってきました。なんといつても食糧不足の貧しい生活が思い出されます。お米は登米より送ってもらいましたので何とか食べることはできましたがおかずは卵焼きかうずら豆がご馳走でした。またアンパンを買いに行くのが唯一の楽しみで、ミカンの缶詰も高価な食べ物でした。また小学校の給食での脱脂粉乳のミルクのまずさには参りました。鼻を指でつまんでいつも一気に飲んだ記憶があります。おかげで大きくなっても、牛乳、チーズはそれが原因で大嫌いになり今でも食べるのが苦手です。小さい時の娯楽としての遊びはメンコ、ベーゴマでまたラジオの連続劇や歌を聴くのが楽しみでした。父は中小企業の役員でしたが何時も家族に潰れることを覚悟しておけと、言い続けておりました。私も結局その後大学も官立には行けず、また役人になれなかったことは、父の期待に反したことになりました。

仕事と晩年

それからの父に関して経過を簡単に述べます。父が勤めておりました中小企業の管財会社は最終的には潰れましたがその二、三年前に別の似たような管財会社に派遣されて立て直すように命じられて同じくこの会社も潰れそうだと仕事に没頭し我々家族と楽しむ余裕がありませんでした。もっぱら母が我々子供の面倒を見ておりました。やはり父は戦前職業軍人であったので身体が鍛えられておりましたのか、朝早くから夜遅くまで働いても丈夫でした。もっとも彼は本当は戦争で死んだ命がラッキーにも与えられたと思っていたのか、黙々と働いておりました。潰れそうな会社であったその管財会社が何かの運が向いてきたのか、高度成長の波に乗り山武の計装会社になり今の〝オーテック〟という会社に生まれ変わり、ジャスダックに上場し二代目の社長になり七〇歳になるまで働いておりました。会社を辞めてからは元来無趣味の男だったので

もっぱら家で若いころ大学の医学部に行きたかった時習ったドイツ語を勉強することが唯一の趣味で勉強しておりました。後はテレビで相撲や女子ゴルフの試合を見るのが楽しみでした。父は戦争の話は自分から話はしませんでした。誰かに聞かれたら話をするだけでした。でも仕事を辞めてからは、昔の仲間との交流や座談会にも出席するようになりました。でも長男の私には戦争についての話は自分からは一切しませんでした。そして六年前九六歳で亡くなりました。

死ぬまで頭はしっかりしておりましたが、一〇歳若い母がその半年前に八六歳で亡くなったのでがっくり来たみたいでもう生きる気力がなくなったと、死ぬ前に言っておりました。私の戦中、戦後直後は疎開先の宮城県登米市より東京の笹塚に住み着いて、父の影響で貧しい中にも心(精神は)は豊かであったと思います。今の世の中は子供が親を殺したり、我々昔からは考えられないような事件が勃発しております。戦後七〇年たって物質的には豊かにはなってきましたが精神的には人間は退歩して見えるようにしか思いません。やはり平和ボケして世の中がおかしくなっているように思えます。

私の考え方の変遷

それでは後半の私の考え方あるいは思想の変遷ということに述べたいと思います。終戦後小学生、中学生になったとき私は誰かに親の職業を聞かれたときは、何時もサラリーマンと答えておりました。そして何かの折父が戦前職業軍人であったというときはちょっと困りました。戦前と百八十度世の中が変わったためそれをどのように私が捉えてよいかわからなかったためです。世の中の価値観が変わったため大体昔の軍人は右翼とみなされ新生日本にとっては軽蔑の眼ざしで見られました。でもたまにはそれはすごがったですねとびっくりした眼で見られることもありました。父は戦争に関しては私にほとんど話をしませんでした。もっとも仕事が大変でそれどころではなかったことが本音でした。今考えますとあの戦争は一部の一握りの上層部の軍人が原因で、ほとんどの軍人はただ命令で従って死んでいった人がほとんどで、権力とは如何に恐ろしいことであることが今よくわかりました。そんな訳で高校、大学になっても皆様のように安保反対、授業料値上げ反対との学生運動に積極的になれなかったのは、この辺の父の影があったからではないかと今思います。父の望んでおりました役人になれないで、民間の会社に勤めた私は、段々と世の中がわかってきて少しづつ物の考え方が変わってきました。最初のうちはどうせ資本主義の世の中である以上偉くなって良い生活をしたいと思いながら、仕事をしてきました。高度成長時代に乗って私も昔の社川族の恩恵を大いに蒙りました。でもだんだんと日本はこのままで将来は大丈夫かなと思うようになりました。

ヤマト運輸小倉昌男さん

そんな時私が時々口に出す、元ヤマト運輸社長小倉昌男さんの〝経営学〟、〝私の履歴書〟を読んで考え方が変わりました。親父から引き継いだ潰れそうな運送会社を宅配便という新物で、物流会社ナンバーワンに仕立てたこと事です。でも私が感銘したのはその経営手腕ではなく、そこに流れる人間的な暖かさです。彼の人生は弱い人間を助け、権力との戦いで一生を捧げた事です。詳細はここでは述べませんが、今の安倍政権に対してのヒントとなりそうなのでそこだけちょっと話します。

小倉さん曰く、私の経験からすると、役人は「弱気を挫き、強きを助ける」性格がある。だから、役人と交渉するときは下手に出たらだめだ。論理的に武装をし、強気で立ち向かう必要がある。最善策は裁判で黒白をはっきりさせることである。今の安倍政権はまさにこの状態であります。簡単に言うと憲法違反をして、閣議決定のみで、自衛隊を戦争に巻き込むように進んでおるのです。小倉さんは商売上理屈に合わない、規

制緩和をしない役所の当時の橋本運輸大臣を訴えた。どうして安倍首相を憲法違反と訴える人が出ないのか不思議でならない。もっとも平和ボケで、いまのジャーナリストのように言論の報道管制の政府に反論できない人ばかりなのでしょうがないかもね。いつから日本人は腑抜けになったのでしょう。小倉さんみたいな反骨精神を持った人が出ないと、将来子どもが徴兵制で引っ張られても遅いですよ。戦前の治安維持法の下でも命を賭けて政府に抵抗した勇気のある人がいたのに、別に政府に睨まれるぐらいの事で済むぐらいでも何も言えない現代のマスコミ、ジャーナリストよ。小倉さんはまたこのように言っております。政治家はなんでも国民の為と言っておりますがほとんどの政治家はバックに業界団体がついております。国民よりも業界が大切なのです。又大部分の政治家は二世、三世の世襲です。だから頭の悪い低次元の政治家には頼らないと言っておりました。今国民のために一生懸命に働く骨のある政治家の出現が望まれます。

土下座する元上官

井伊　直允

小学校校長先生の祝辞

私達がこの国に呱々の声を上げてから一、二年後に現憲法が施行されました。従って私達同期生の仲間でその時の状況を体験・知見した者は一人もいません。ましてや終戦直後の日本のこと等誰も知りません。

それにもかかわらず私達は戦争の悲惨さ・非人間性を知っており、現憲法の素晴らしさを肌身に感じています。それは私達の親・兄姉そして先生や近所の人達から話を聞いたり写真を見たり、はたまた身近に戦争の犠牲者がおりその方達からの戦場の話を聞いたりしたからです。そしてその人達の口からは異口同音に「もう二度と戦争をしてはいけない」と発せられたのです。

「戦争の放棄」はその人達の心からの誓い・願いであり、誰かが言う様に「押し付け」られて言っているものでもなければ嘘を言っているものでもありませんでした。

私が入学した新宿区立東戸山小学校の入学式（終戦から既に五年）でこんな事がありました。私達の入学を祝って迎えてくれた校長先生がその祝辞の中でこう発言されたのです。

「私は終戦の前から校長を務めており、君達のお兄さんやお姉さん達に〝日本の為に戦場で死になさい〟

と教育してきました。幼かった子供達とその親御さん達に大変申し訳ない事をしました。今後、私は君達を二度と戦場に行かせない為に身命を賭していく積りです」

憲法九条は、こうした先輩達の血涙流れる反省の上に立って国民に受け入れられたのです。当時保守・革新を問わず「戦争の放棄」は国民何百万人の血で贖われた決意として世界に表明されたのです。自分は戦場にも行かず一滴の血を流す積りも無い「戦争フェチ」の幹事長や膨大な薄汚い利益を財界に齎す見返りに、自らの政権を支持して欲しいお坊ちゃん首相などの為に変えられてはなりません。

二人の戦争体験者

私達同期生の仲間内でその時の状況を体験・知見した者は一人もいません。それにもかかわらず私達が戦争の悲惨さや非人間性を知っているのは、私達の親・兄姉そして先生や近所の人達から話を聞いたり、はたまた身近に戦争の犠牲者がおりその方達からの戦場の話を聞いたりしたからです。私が何人かの先輩達からお聞きした「戦争体験」のお話を二話お伝えしたいと思います。

最初の「戦争体験」は、社員三〇名程の中小企業の社長であったN氏の話です。N氏は既に二〇年前に鬼籍に入られていますがご健在だった頃の話です。N氏が同席した会社の或る年の「暑気払い」の席上、社員の一人が「同期の桜」を歌おうとした時でした。「若い者がソンナ歌を歌うものじゃない！」とストップを掛けたのです。後日同席した専務（N氏の創業仲間）から以下の様な話を聞きました。

N氏は立教大学在学中に召集令状を受け、直ちに海軍鹿屋航空基地に配属されました。其処では「特別」攻撃隊の要員として、離陸・飛行・体当たり（急降下）の訓練を受け着陸の訓練はなかった（一番難しい技術）そうです。そしてなんとか離陸が出来る様になった三ヶ月後、基地に配属された「同期の桜」達に出撃命令

が下されました。N氏の出撃順番が同期仲間の最後であったので仲間の見送りで数日が過ぎいよいよ明日が自らの出撃という段になって、突然「終戦の詔勅（玉音放送）」を聞かされたそうです。自らの命は危機一髪で助かりましたが、同期入隊の仲間の中には立教大学時代からの友人もおり、その友人の一人は「帰らぬ飛行」を終えていたそうです。

二番目の「戦争体験」は、私が稽古に励んでいる詩吟の会で今年米寿を迎えられたお歳にもかかわらず朗々と吟詠される警視庁・元警視正のS氏の話です。

S氏は筑波山北麓の農家に八人兄弟の三男坊として生まれ、一五歳の時家計を助けるため「海軍特別年少兵*」に志願されたのです。採用されて間も無くニューブリテン島・ラバウルへの赴任を命じられ任地に赴く途上ビスマルク海で米軍の機雷攻撃を受けて海上に投げ出されたそうです。幸いにして甲板の端切れと思われる板を見つけそれに摑まって暫く洋上を彷徨っていた処、同じく洋上を彷徨っていたS氏の上官が彼を見つけ「おいS！その板は俺が先に見つけたのだから俺に寄越せ！」と無理やりに奪い取ったそうです。S氏は摑まる物を奪われ素手で泳ぎながら鮫に見つかる事もなく約四時間後に付近の捜索に当っていた味方の船に救助されたそうです。これには後日談があり、終戦後何年目かにS氏が靖国神社に参拝に行った時「オーイS」と呼掛ける声が聞こえ、振向くと其処には例の上官が立っていたそうです。彼はS氏の顔を見るなりガバッと膝を折り土下座をして「S！生きていたのか、良かった。アノ時の事は許してくれ、アレ以来お前の事が気になって気になって仕方が無かったのだ」と許しを乞われたそうです。

以上二つの「戦争体験」から言える事は、いみじくもK君が言っている以下の事に集約されるのではないでしょうか？

「戦争は何世代にもわたる人びとの努力の成果を破壊するだけではありません。恐ろしいことは殺される

ことだけではありません。一番恐ろしいことは、戦争によってわれわれの仲間の中に人を殺せるような人がたくさん作られ、また人を殺したり傷付けてしまったことを悔やんで一生を悶々と過ごす人をたくさん生じてしまうことだと思います」（城北会誌六二号 p13）

＊　海軍特別年少兵　昭和一六年に海軍が創設した一四～一六歳の少年兵

呉から石井へ

石井　延洋

私は小学校時代まで台湾の中部台中から三〇分位の南投県竹山鎮で育ち、卒業後東京に来ました。世田谷区松原で母方の祖母、叔母、兄、叔父と一緒に暮らすようになりました。松原小学校の教頭先生から五年生に編入したらとのアドバイスを受け一年留年ということになりました、なので皆さんより一年年上になります。

父親が大陸（多分福建省）から台湾へ渡った漢民族の子孫で、勉強がよく出来たという事で町から資金が出て、日本へ留学しました。本来は東京の大学だったが岡山大学の医学部に入り、昭和一〇年に卒業しました。インターン時代に母親（石井）の弟の往診に行ったときに恋が芽生え岡山の安田さんの世話で結婚しました、兄（明）が生まれ私が一七年岡山県の味野で生まれ、父方の親が危篤との事で急遽台湾に戻らなくてはならなくなり、船で台湾に行きました。その船は日本に戻るときに撃沈したそうです。兄（明）は母方石井に預けられ日本に残りました。私は昭和二九年夏日本に来る時まで兄には会ったことがなかったのです。

父の姓名は呉登山で母親の石井を名乗り名前も克彦に変えました。結婚の時に最終的に日本に帰化することを約束したのだと私は本人たちに確認していないが、推測しています。私も台湾時代は呉延洋という名前でした。日本に来て石井を名乗るようになったのです、一時琴坂を名乗ったこともあり、三回も名前が変わ

りました。不徳の致すことで恥ずかしい次第ですが。ざっと個人的な事情を書きましたが、台湾時代の小学校でスターリンはモンスターだと教えられていて日本に来て初めて人間であるとの認識をしました。教育の恐ろしさを覚えました。

今の政権は情報を操作しています、政府関連のニュースの多い事、ニュアンスの微妙な事、都合の悪いニュースをタイミングよく外すことなどなど…。大きな歴史の流れを変えるのはめちゃくちゃ大変ですが皆が少しづつその心算で積み上げて行けば少しずつでも変わる、また早いうちに変えないとダメです。雪かきの要領と同じ早いうちにしないと雪が踏まれて地面にくっ付いてかき難くなります。早いうちにやらなくてはなりません。

疎開

石田　郁子

戦後七〇年という節目の年だからだろう。いつもの年よりもより多く、より鮮烈な戦争体験が今年は語られている。それらの体験を読むにつれ、自分自身の体験なぞ取るに足りないものに思えてくる。このまま、書くのを止めようかとも思ったりする。しかし、この与えられた機会は、自分の戦後体験を思い出すまたとない貴重な時でもある。その機会を無駄にすることは惜しい。

家族がバラバラに

私は昭和一八年四月に東京の大田区北千束に産まれ、昭和二〇年、終戦を迎える前に茨城県に疎開したが、幼くして疎開先で物心が付くまでのことはほとんど知らない。ずーっと疎開したのは二〇年四月だと母親から教えられと思っていたのだが、三歳上の姉の話によるとどうもそうではないらしく、同年六月か七月だったらしい。この間の一ヶ月二ヶ月はたかがでは片付けられない。昭和二〇年二歳になって間もなく、終戦を目前に控えての疎開だったようだが、疎開した先は茨城県の今の土浦市。最初は予科練のある阿見だったらしいが、いよいよ終戦間際、危険も迫り霞ヶ浦の対岸の地、高野（こうや）に移り、さらに当時の新治郡上大津村字田（田村と呼んでいた）に移り、そこで物心が付いた。今だったら考えられないほどの襤褸を纏い、

粗食の毎日だったのに、まだ物心が付かない私の幼児期がこの国の一番大変な敗戦前後の時代が重なり、周囲を見ても自分同様。それでもまだ食べるものがあり、屋根のある家に住まうことができ、着るものがあったことで、恨むことも悲しむこともせず、ぼんやり、のほほんと戦後の時代を過ごしてきたような気がする。また、周囲の大人は戦争のことを語らず（思い出すことに耐えられなかったのだろう）、聞きもせず（大人たちは、触れられたくないような感じがした）、周囲を見回せば皆が皆自分と似たような生活をしている。物心が付いたばかりの私には、これが当たり前なんだとなんら疑うこともしなかった。何もない中で、ひたすら楽しみを見つけようとしていた自分を今は愛おしいと思う。

昭和二〇年三月一〇日の下町地域への東京大空襲の後、私が生まれた北千束辺りにも頻繁に焼夷弾が落とされるようになったという。家の近くも危なくなり、疎開していく家も多くなったようだ。今年（二〇一五年）三月、兄の学童疎開の体験を聞きに横須賀に住む昭和一三年生まれの次兄を訪ねた。その年の四月、赤松国民学校（赤松小学校）に入学したばかりの兄は五月に富山県の福光という松村謙三代議士の出身地のお寺に集団学童疎開をしたとのこと。疎開する直前に家の庭にあった溝で左肘を怪我し、左手を三角巾で肩から吊るした状態での疎開だったそうだが、腕の怪我のためもたもたしていると、「なんだ貴様は！」と寮長から怒鳴られたそうで、疎開というとまずこのことを思い出して、辛くいやな気持ちになるのだと言う。七歳上の長兄はそれ以前にすでに学童疎開していたらしいが、大人たちの裏の姿（ずるさ）を垣間見ることも多く、大人たちが信じられなくなり、人格形成にマイナスの影響を受けたような気がする。若くして不幸な死に方をした長兄だったが、ここにも戦争の影が重くのしかかっていたに違いない。

次兄が疎開して間もなくの五月二五日、新宿界隈への空襲で祖父が淀橋に持っていた家作一〇軒が全焼したという話はよく親から聞いていた。物心が付いた私の記憶に残る祖父は大分もうろくしていたが、この空

襲による家作の焼失は祖父にとって実に大きなショックキングな事件であったろうと、今は想像している。だれもかれもがみんな大きな穴を心に開けたまま、家族を生かすために懸命に生きた。それこそ一生懸命に。祖母は中気のため我々と一緒に疎開することが出来ず、何所帯もの人が住みついていたわが家に住む一家族に託して千束の家に残った。戦争により、疎開により、多くの家族がバラバラにさせられた。

疎開から戻って

学童疎開先では粗末な食糧事情故に、どんなにお腹を空かせたことだろう。間もなく敗戦で戦争は終わるが、叔父の迎えで疎開先の我が家に帰ったのが二〇年九月。兄は学童疎開先の富山県の福光から叔父の迎えで引き揚げてきた。常磐線の土浦駅で下車し、そこから舟で対岸の沖宿へ、さらに徒歩で高野（こうや）の家族のもとに辿り着いたのだという。疎開先から親元に帰り着くまで、その一人ひとりみんなが大変だった。兄はあまりにも痩せ細っていて、医者は「よくこんな状態で生きていた」と驚いていたと言う。医者の診断では極度の栄養失調からくる「肺浸潤」で、一年生の二学期いっぱいは学校を休んだとのこと。その時お世話になった家は浜岡さんというかなり大きな農家で、その家の離れを貸してもらったのだそうだが、その家には同級生の男の子がいて、その子が仲良くしてくれたのが救いだったと言っていた。

兄は学童疎開していたので、親元に帰るまでのことは詳しくは知らないが、多分我が家の疎開は六月か七月なのだろう。最初は茨城県の阿見だったことは私も知っていたが、どうして予科練のある阿見だったのかその訳は聞いたことが無く勝手に想像していたのだが、兄の話を聞いてその通りだったことを知った。父は心理学を専門とする人間、兄の話によれば父は阿見の予科練航空隊の嘱託か顧問だったようだ。黒塗りの板飛行機を作り、まだ日本に十分戦力があるのだと、敵を欺く研究にでも関わっていたのだろうか。父にとっ

ては子供に話したくない大きな傷だったのだろう。終戦直前、いよいよ阿見も危なくなり、対岸の高野（こうや）に移り、さらに、一年一月に私が物心が付く霞ヶ浦と筑波山の見える田村に移った。これで幼くて空白のままだった自分史が繋がった。

田村での暮し

田村（茨城県新治郡上大津村字田。今は土浦市田村町）の家の前には霞ヶ浦まで延々と水田が広がっていた。今は全部蓮田に変わっている。水田地帯は湖畔を走る県道を挟み小高い台地となっている。我が家はその中腹にあり、右手には筑波山が見えて風光だけは明媚だった。その中で私は全くの自然児として育った。我が家の一軒上に一歳年上の女の子がいて、私はたまにままごとなどして遊んだこともあったが（床屋さんごっこで、前髪をジグザグに切られてしまったことがあったっけ）、大抵は自然の中で一人で遊ぶか、兄や姉の後について回っていたような気がする。小学一年生に上がるまでのほとんどの時間を自然と戯れていたわけだ。東京の家は幸い空襲で焼けることもなく、母は何やかやいろいろ用事もあったのだろう、時々上京して疎開先の家を留守にした。また病気で入院ということもあったようだ。そんな時は近所の人がご飯の支度などを手伝ってくれることもあったが、小学低学年の三歳上の姉に家事の仕事が重くのしかかっていた。私も小学校に上がるか上がらないうちから、家事を手伝った。それでも私は小学校に上がるまでは、母を独占できたこともあり、母への恨みも持たなかったが、姉は「あれでも母親か」と、今でも恨み言を言う。当時の姉の辛さを想像すると、ここにも戦争の被害があったと思わざるを得ない。

我が家は杉の皮で屋根が葺かれ、壁は泥に藁を混ぜた漆喰、土間があり、簡易な竈があった。冬には篭を背負って姉と二人で裏山に杉の葉を集めに行ったものだ。その杉の葉は土間の一角に積んであり、竈や風呂

の焚きつけに使用した。家の外にはちょっと離れたところに、そんなに深くはない井戸があった。その辺りは地下水が染み出し、宅地としては余りいい場所ではなかったのかも知れないが、家と井戸の間には細い流れがあり、そこにセリやミツバなどが生えていた。

私は一人で田圃の畦などで草を摘んだりして遊んでいたようだ。お陰で野草大好き人間に育ったしまったが、集団学童疎開した人たちは、とにかく飢えを凌ぐために食べられるものは何でも摘んだという。幼い日に私は楽しく野草を採ったり、小さな生きものを捕っていたが、戦時生きるために必死で食べられる草を探していた人たちには、今更野草摘みでもないようだ。見るのもいやなのかも知れない。

我が家は辛い中でも父のユーモアに救われることが多かったように思う。父は土曜日に疎開先に帰り、月曜日にまた東京の家へ戻っていった。父は土浦と田村の片道一里半（六㎞）の道程を徒歩で、そして土浦から東京へ汽車に乗って、毎週毎週行き来する生活が五年も六年も続いたわけだ。ご苦労なことであった。優しく、面白い父であったが、それでも週一度しか帰って来ない父に私は甘えることが出来ないまま大人になってしまった。「あの人だあれ？」という感じで父を見ていたような気がする。

東京の家は焼け残ったが、戦後焼け出された人が多く住み付き、疎開先を引き揚げることは不可能ということで、「んだっぺー」で物心が付き、小学二年生の二学期終了後、疎開先を引き揚げ、神奈川県横須賀市の久里浜に引っ越したが、そこでも戦後の物資のない生活はまだまだ続いた。

戦時体験・戦後体験――私の場合

石原　邦雄

前書き

Kさんの寄稿（「若いみなさんへ」）による問題提起に触発されて、多くの方々から発言が寄せられ、それぞれに大変共感もし、啓発されました。問題は二つの面があると思いました。ひとつは、今日の政治情勢と社会状況を危機的あるいは危機の始まりととらえて、とりわけ若い世代にそのことを訴え・伝えていく必要性、ということ。もうひとつは、我々自身が、戦時体験・戦後体験を再確認することの重要性ということかと思います。そして第二の点は、戸山高校の同期生としての交流を続けている我々にとっては、共通した高校教育を戸山で受けたことの意味を考え直すという課題にもつながっていると思います。

私は長らく大学教師をしてきたので、若い世代と常に接点を持ってきましたが、授業その他で政治問題をストレートに取り上げることはしてきませんでした。それは、一方的な政治論議やイデオロギー論議を持ち込むことは教育として望ましくないという考えがあったからではありますが、一面では、確信をもって語らずにはおれないという見方を自分なりに打ち立てていないことの表れでもあったと思います。それは、教育の場という条件に限らず、家庭でも自分の子供たちに対しても積極的に戦争や政治の話をしてこなかったことにもつながっています。

この三月で職業生活から離れてみると、もう少しやりようはあったのではないかという反省はあります。下の世代との接点という意味では、六三歳の一回目の定年退職まで四半世紀勤めた大学での教え子たちと、スキー合宿と称して毎年冬にスキーに行くグループが二〇年以上続いていて、私にとっての一つの財産になっています。レクリエーションとともに、職場生活や家族生活の経験交流としても貴重なものですが、そこでも政治課題や戦争の危機などにまでは話が及びません。Kさんの問題提起と若い世代への呼びかけについても、内容は共感できますが、そうした手近なところにも、まだ球を投げてみるところまで踏み切れないでいます。

さて、そんな状況で、もう一つの方の課題については、自分たちと同世代の者同士の交流として、高校時代とそれ以後の共通体験を確かめ合うことは比較的容易なことですが、その同期生たちが、それ以前の戦中戦後の時代にどのような生活経験を持って戸山高校生となっていたかを知りあうことは、大変貴重な試みであると思います。とりえず、その面での私の体験を書いておこうと思いました。

戦時体験

他の方も同様と思いますが、一九四三年生まれの私には、第二次世界大戦にかかわる直接の記憶はありません。身近な人から聞いた話が間接的な体験となっていることが少なからずあります。四歳年上の兄からは、空襲の際に防空壕に逃げ込んだことや、B29爆撃機に日本の戦闘機が体当たりして撃墜した様子を眺めていたといった話を聞いています。父方の伯父一家が満州から引き揚げて来て我が家に身を寄せていた時期があることは、かすかに記憶しています。母方の叔父がニューギニア戦線の生き残りであることは聞かされていましたが、具体的な戦場での体験を聞いたことはありません。父は鉄道省勤務で、アルバムに出征の記念写

真はありましたが、入隊は三日ぐらいで職場に戻ったということで、戦場には一度も行っておらず、親戚にも戦死者はいなかったので、間接的にしても戦争体験やその影響を実感することは多くありませんでした。戦時の影響として、自分には記憶はありませんが、乳児期に母乳が出ず、栄養失調の結果から失明の一歩手前の状態に陥り、母が私を背負って米軍機の機銃掃射の恐怖の中を病院通いしたこと、父が職場のつてで手に入れたペニシリンの注射液が尽きたら失明を覚悟してくださいと医者に言われたが、かろうじて回復が間に合ったといった話を繰り返し聞かされてきたのが、私の記憶以前の体験になっています。そのほか、空襲や疎開のこと、多くの着物とイモやコメと交換した買い出しのことなど、主に母からあれこれ聞かされたことが記憶に残っています。

もう一つ、母から何度か聞かされて、刷り込まれている戦時期のエピソードがあります。本土空襲が激しくなったころ、父は兵役には就かなかったけれども、鉄道の本務のために家に帰らぬことも多かった状況で、母に言い置いていたことがあった。空襲を受けて危ないときは、他のものは捨ておいてよいから、子供と一冊の本だけ持って逃げろ、それさえ維持できれば、日本は滅びないと、母に伝えていたという。その一冊というのを、母は「古事記」であったとずっと私たち子供に話していた。これは我が家における一つの伝説となっていたものだが、私が大人になって以後に、これは若干の脚色があるのではないかと思うようになった。一冊の本というのは、実は「日本書紀」であって、母が意図的にそれを「古事記」と修正して子供に語っていたと思われたのです。

母は戦後の民主主義思想をかなり積極的に受け入れていた人であり、子供たちの側も学校でもそうした教育を受けて育っていたから、天皇制の維持こそ国の基盤だという考え方を受け入れにくかったし、子供にも伝えにくかった、あるいは伝えたくなかったのだろうと、私は今では推察しています。これについては、父

母と直接話をしておけばよかったのに、なんとなくそこまで話をすることもないまま、父も母も送ってしまったのを残念に思っています。

戦後体験

私には敗戦後としての記憶しかないわけですが、その中での一番古い記憶の一つは、兄が友達とバケツにたくさんのザリガニを捕ってきて、それを満州帰りで同居していた伯母が調理して食べさせてくれることになった場面、ただし母は、大きな通りを渡って遊びに行くのは、進駐軍のジープにはねられて死んでしまうから絶対ダメと言ってひどく叱っていたという場面です。

むしろ敗戦後体験ということでは、そのあと三歳ごろに九州の小倉に父の赴任とともに転居してからの記憶はいろいろあります。

国鉄の官舎のすぐ近くが米軍に接収された元の兵器廠だったので、列車の引き込み線のあるそのゲートには、銃を構えた米兵が常に警備しており、それが怖くて近寄れなかったこと。兄たちは米兵のジープを追いかけるとガムやチョコレートを投げてもらえるのだといったことを話していたけれど、私はそれもうらやましいというより、やはり怖くて近寄れないという気持ちだったことも思い出します。

また、占領期ということでは、国鉄の業務も進駐軍とのあれこれの折衝や付き合いが必要であったようで、住んでいた官舎の広間で「アメリカさん」とのダンスパーティがたびたび催され、両親がダンスの先生の指導を受けながら、そうした社交をこなしていたのを、子供心に楽しくない気分で受け止めていたことも思い出されます。あれこれの外国のダンスのレコード曲に交じって、なぜか歌謡曲の「湯島の白梅」もダンスの曲としてよく流されていたのを覚えています。

もう一つ当時の経験で印象深いのは、天皇が全国を巡幸して敗戦後の国民を励ますということがなされ、その「お召列車」が見られる道路に人々が並んで待ち、列車がゆっくり通過するのに合わせて、小旗を振ったり、万歳を唱えたりするのを、手をひかれながら見て、万歳を唱和するように促されたけれども、なにか恥ずかしくてできなかったことも記憶している。その後我が家のアルバムには、お召列車の窓を開けて立って沿道の人々を見ている天皇の写真も貼られていたので、それも何度か見ながら、記憶が固まっていったと思われます。

もう一つ小倉時代の記憶に残るエピソードは、国鉄の大量解雇に反対する激しい労働争議の一端との遭遇であった。地方の部局の責任者であった父の官舎にもデモ隊が押し寄せてきて、労働歌や革命歌が大声で歌われ、板塀の上にまたがって旗を振るものがいたりと、騒然とした状況にあったなかで、兄と私は父の部下の職員に連れられて官舎を抜け出し、八幡市にいた伯母の所へ数日間避難させてもらうということがありました。それについては何か大変なことがあったという感じはしていましたが、特に怖い思いをしたという記憶にはなっていません。むしろ親と離れて初めて親戚の家に泊まるということになったなかで、それがさみしいとか心細いとかいう感覚もあったかと思われますが、それもさほど記憶されるものにはなっていません。その時のことで一番強く印象に残っているのは、夕食後、伯母夫婦が我々兄弟の応対をしてくれているところで、居間のふすまが開いて、その家の子供たち、つまり従兄弟たちが次の間に正座して、「お先に休ませていただきます」と手をついて挨拶して寝室に行くという場面があったことです。自分の家とはずいぶん違った家庭生活がなされているようだというショックと違和感があったことは、今でもよく覚えています。

以上が、記憶以前の私の戦時体験と、二歳から五歳くらいまでの、埼玉県大宮市と福岡県小倉市での「記憶された戦後経験」の断片です。その後東京への転任に伴って都下の国立に移転してそこで小学校に入学、

五年生の秋に札幌に転居、中学一年の春休みに再度東京に転居して中野に住み、区立第五中学校を卒業。そして当時の学区制のもとで、「越境入学」して戸山高校生になったというのが、私の高校生になるまでの道順（ライフコース）であったといえます。この間の学校生活や転居・転校を伴う生活経験、友人や先生との関係など、人間形成史にかかわるあれこれの面をたどることができると思うし、とりわけ戸山高校の教育で開花していた民主主義・平和主義・科学主義の価値観や社会問題への関心の持ち方などは、少なからぬ影響を受けた人生経験であり人間形成過程であったと思います。

今日、個人としては老年期に入った中で、社会情勢としては、すでに新しい戦前期に入っているのではないかという危機感をもたざるを得ないような時代の転換点にあって、とりわけ高校時代を共有している仲間たちと、自らを振り返り、社会の問題への対し方について語り合えること、そしてさらにそれを何らかのアクションにしていくことを模索するということは、大変貴重なことだと実感しています。

日中戦争と戦犯だった父の戦後

伊東　秀子

一　中国からの引き揚げ

私は、一九四三年八月一五日、日中戦争が終わるちょうど二年前に、旧満州新京の関東軍司令部陸軍官舎で生まれた。父は、その年の七月末、満州の関東憲兵隊司令部に配属となり、その後、鶏寧・東安そして四平・最後は通化の憲兵隊長を務め、一九四五年八月二四日、満州に侵攻してきたソ連軍を通化の駅に迎えに行ったまま連行され、消息を絶った。父はそのことを事前に察知していたのか、朝、家を出る時、母に「今日はどうなるか判らない。子供達を大事に育てるように」と言い残して家を出たという。

その後私たち家族は、敗戦の翌年の一二月、母が五人の子供（一五歳の長女、一三歳の長男、一一歳の次男、六歳の三男、三歳の私）を連れて、中国のコロ島まで歩き、そこから船に乗って長崎県の佐世保に引揚げた。当時三歳の私にはこの頃の記憶は全くない。

二　父の半生と満州国の歴史

私の父上坪鉄一は、明治三五年（一九〇二年）四月九日、鹿児島県のさつま半島の突端に近い小さな農村に、四人兄妹の二男として生まれた。祖父の庄之助はとても信仰心が篤く寺総代を務め、また周囲の面倒見も良

くてリーダー的存在だったらしい。大変教育熱心で、長男は高等商船学校（後の東京商船大学）を出て外国航路の船長になり。妹二人も師範学校を卒業している。二男の父は村の高等小学校卒業後鹿児島一中に進み、その後、陸軍士官学校に進学した。

父は陸軍士官学校卒業後、当時海軍の高官だった母の叔父（後に海軍兵学校の校長など歴任）の世話で叔父の家に身を寄せていた母と見合いして、昭和五年一一月に結婚した。父は、結婚当時旭川の歩兵二七連隊の勤務で、雪深い旭川で新婚生活が始まっている。昭和六年一〇月、長女の紀恵子が出生したが、その年（一九三一年）の九月一八日、関東軍が謀略により満鉄の鉄道を爆破して中国軍への攻撃を開始したため（柳条湖事件）、父は初めての子供の顔も見ないまま、身重の妻を置いて中国東北部の戦地に出かけていった。そのため、母は九州佐賀に帰って長女を出産した。

さらに、昭和八年二月に長男宏道が、昭和一〇年九月には二男隆が旭川で出生している。この三人の子供が出生した後の昭和一二年七月七日、関東軍はさらに中国の中心部の華北に侵略を拡大して日中間の全面戦争が始まり（支那事変）、父はこの戦争に参加するため、二年間中国に出征している。この戦争で父は落馬し、大腿骨を骨折したため、以後、憲兵隊所属となった。このように、父と母が結婚して以降、父はずっと日中戦争に関わっている。

日本は日露戦争（一九〇四～〇五年）の結果、中国東北部（いわゆる満州）のロシア権益を受け継ぎ、遼東半島（関東州）の租借権と、東清鉄道南部線の長春～大連間の経営権を継承し、関東都督府、南満州鉄道株式会社（満鉄）、関東軍などを設置して満州経営に乗り出した。関東軍は、武力によるさらなる権益の維持・拡大を画策し、一九三一年九月一八日、石原莞爾らの謀略により満鉄線を爆破、それを中国側の仕業であると主張して中国軍への攻撃を開始し（柳条湖事件）、東北三省を占領下においた（満州事変）。その既成事実

を基にして、一九三二年三月、日本は、傀儡国家「満州国」を作り上げ、長春は「新京」と改名され、満州国の首都となった。この地で私は生まれたのである。

日中戦争から七〇年後の二〇一五年九月一八日、私は満州事変が勃発した瀋陽（旧奉天）に滞在していたが、九月一八日午前九時一八分になるとサイレンが鳴り、走行中の車が一斉に停止した。これは屈辱的なこの日を国民が忘れない為にと、中国の主要な都市で毎年行われていると言う。加害者は忘れても被害者は戦争の傷痕を絶対に忘れない。私はこの事を改めて痛感した。

『満州事変』について、大多数の日本国民は、中国側の権益侵害に対する日本側の自衛であるとの軍部の宣伝を信じ、熱狂的に歓迎したのである。多くの日本の国民は、関東軍が満州に「王道楽土」を建設するという軍部の宣伝を信じていた。

以後、日本は、華北（中国の中心部、黄河下流域）まで侵略を続け、アジア太平洋戦争へと、足かけ一五年に亘ってほぼ連続的に戦争を遂行・拡大し、一九四五年八月の敗戦を迎えたのである（一五年戦争）。

三　引揚げ後の鹿児島での生活

私たちは、日本に引揚げて以後、長女と長男は佐賀県の片田舎に住む母方祖母の許に預けられて女学校や高校に通い、母と下二人の兄妹は父の実家の鹿児島県の農村で、母が人生で初めて農業に従事する生活となる。

一九四六年の暮、私たち母子四人の、鹿児島県の小さな農村の父の生家での暮らしが始まった。母は、内に秘めた強い意思で佐賀の実家に世話になる道を選ばず、夫の生家で自ら農業をやり生計を立てる道を選んだのである。

当時、私は三歳になったばかりで、栄養失調のためやせ細っていたと言う。その後遺症故か、小学校入学まで「脱肛」が続き、母や姉・兄達は「秀子はいつまで生きられるか判らない。この子はとにかく生きていてくれればいい」と言いながら、可愛がって育ててくれた。

母にとって、三八歳になって初めて農業をやることは大変であったと思う。しかし、愚痴一つこぼさず、貧乏のどん底にあっても、母には突き抜けたような解放感が漂っていた。「お父さんは必ず生きている」、「こんなに苦労して引き揚げてきたのだから、子供達には本当にやりたいことをやらせたい」「戦争が終わって本当に良かった。三人の息子達を軍人にだけはしたくなかった」と繰り返し語っていた。父がまだ現役だった頃、三人の息子たちを前にして「この子達を幼年学校に入れる」と宣言し、論語・孟子を暗唱させていたという。母はこの言葉を聞く度に「絶対に息子を軍人にだけはさせたくない！」と秘かに思い、満州での特権的な生活の中でも、「よその国を占領し、中国の人達をこき使い、こんな特権的な生活をする等、日本がやっている事は本当におかしい」といつも思っていた、と語っていた。

その頃の母は、よく、縁側で一人静かにお茶を飲みながら、何かを考えていることがあった。そんな時、母はいつも遠くを見つめているような、穏やかな表情をしていた。そんな母の表情が幼い私は大好きだった。今でも母の思い出は、あの頃の母の表情に繋がっている。

四　帰国後の父

私が小学校五年生の時、中国紅十字会の李徳全女史が来日し、中国にいる日本人戦犯の名簿が公表され、父が生きていることが判った。その時の嬉しさは生涯忘れられない。その後、母は父との面会のために撫順へ行き、さらにその後、京都大学の学生だった二男の隆も友人達のカンパで撫順を訪ねた。二人とも、ソ連

に抑留された日本人の厳しい強制労働の話を聞かされていただけに、中国で父たちが受けていた待遇に感激し、大変感謝していた。

一九五八年、私が中学三年の時、父が帰国した。当時、姉や兄達は進学のため家を離れ、母と二人だけの生活に慣れていた私は、ちょうど思春期だったこともあり、初めて出会った父に対してなかなか心を開けず、また、ソ連と中国の収容所で一三年間を過ごした父の規律正しい生活スタイルが、母と私の生活には馴染めず、夫婦・親子の関係はなかなか円滑にいかなかった。そうした中で父は「戦争だけは絶対に良くない」「中国に対してやったことを思えば、死刑になって当然だった。本当に、中国に対しては、足を向けて寝られない」と事あるごとに語っていた。その父の言葉には本気が漲っていて真に迫る迫力があった。そのためか、その父の言葉が私達家族の魂に深く沁み込み、それが人生の支柱となって今も中国への感謝の心に繋がっている。

かつて憲兵だった父には、帰国後、公安調査庁や防衛庁等に務めないかという話もあったようだが、父はきっぱりとそれを断り、幼友達が経営する出版社でまじめに仕事に励み、私達の生活と学業を支えてくれた。父の性格から、外で戦争の加害を語るようなことは一切なかったが、家の中では、戦争の悪を語り続け、黙々と仕事に精を出し、子や孫に愛情を注いでくれていた父の姿が、今でも胸に焼き付いている。

父は「戦争は、人間を獣にし、狂気にする」と語り、「平時は真面目で穏やかな人間が、戦地に行くとどんな酷いことも平気でする人間に変わる。他人の家の物資を奪い、平然と人を射殺し、女を見れば強姦する。本当に戦争だけはやってはならない」と語っていた。こんな父も自分が中国で何をしたかについては具体的に語ろうとせず、私達もあえてそれを聞こうとしなかった。私が、日本軍が満州で行った残虐非道な行為と父の罪責について具体的に知ったのは、今から五年前のことである。

父は、貧乏のさ中にあっても、子供達の進路については「目先の事を考えず、自分が本当にやりたいことをやり通しなさい」といつも語っていた。戦前の日本で農村の秀才が立身出世するためには軍人になるしかなかったのであろう。そのために中国の侵略戦争に従事することになった自分の半生を振り返り、父親として魂の底から発した子供たちへの伝言だったと思う。そして、父は、人生の最後に

「兄弟仲良く過ごしなさい。絶対に戦争を起こさないように、日中友好のために、力を尽くしなさい」

という遺言を残し、八二歳で他界した。

五　日本人戦犯たちの「認罪」

敗戦と同時にソ連軍に連行された父は、約五年間、シベリアのハバロスクで多くの日本人捕虜と共に強制労働をやらされたという。しかし、一九四五年に中華人民共和国が設立した翌年、日中戦争に関与した者約一〇〇〇名は中国政府に引き渡され、撫順の戦犯管理所に収容された。そして当時の周恩来総理をはじめとする中国政府関係者は、日本人戦犯に対し、人権と人道主義に基づいた処遇と教育を行った。建国直後で中国人が白米を食べることは犯罪とされコーリャンしか食べられない大変貧しい国情の中で、日本人戦犯には日本人の食習慣に合わせて白米や肉・魚を食べさせ、運動や読書・趣味の活動・健康維持を保証するなど人道主義的処遇を行った。そうした中で、戦争中に自らが行なった犯罪的行為に一人の人間として向き合い、なぜ中国に来てそのような非道な行為を行なったのかを考えさせる教育を行なったと言う。その教育は抗日戦争を勝利に導いた革命的精神に立脚した処遇と教育であったということを、後になって私は知った。その人道的な処遇が日本人戦犯たちの魂を揺さぶり、人間としての良心と罪の意識を、深く目覚めさせていった。当初、自分たちが中国人にやったと同じく死刑相当の処刑を受けるであろうと覚悟しつつ、「軍の方針に従っ

ただけで、個人には責任はない」と反抗していた。そんな中で、戦犯管理所の職員のほとんどが日本人に家族を殺された苦しみを持っていたにもかかわらず、職員達は誠実かつ真面目で忍耐強い態度で戦犯達に接していた。そして日本が中国を侵略するに至った歴史・その根底にある帝国主義的な思想を学習し、戦犯同士の自己批判・相互批判を重ねる中で、次第に被害者の立場や感情に立って自分の行った行為を内省するようになり、居ても立っても居られない罪の意識に苦しむようになったという。それが父たちの人間性を根底から変え、その後の父や家族の生き方に絶大な影響を与えてくれたのである。

私は思春期の頃初めて父に出会ったために、男性である父が疎ましく、口もきかずに反抗ばかりしていた。しかし、「本当に中国に対して済まない事をした」「戦争だけは絶対にしてはならない」と語り続け、戦争の責任を「軍」や「国」などに転嫁せずに自らの罪として背負おうとしている父の姿に、心を閉ざしていた少女の私も段々心動かされるようになり、父に対する尊敬の念が深まっていった。そして私だけでなく、子供達みんなが「反戦平和」と「永遠の日中友好」を深く胸に刻んで生きることになったのである。人間の『本気』の持つ無限の力を、私は父から教えられた。

六　戦犯たちの釈放

約一〇〇〇名の戦犯の取調べと供述書の作成が終了した一九五五年～五六年初頭にかけて、戦犯の最終処分の検討が始まり、周恩来首相の主宰する中央政治局会議では、日本人戦犯に対する寛大処理の原則（判決は軽く、一人の死刑も無期刑も言い渡してはならない）が決定された。しかし、これでは中国の民衆の憤懣が抑えられないとの理由から抵抗や不満も出された。しかし、結局、一九五六年四月、人民代表大会は最終的な処理方針として、「主要でない立場の者と改悛の情が著しいものは寛大な処置として起訴免除する」との

方針を出し、一九五六年七～九月、一〇六九名のうち四五名を除いた全員が起訴免除となって釈放され、帰国したのである。

釈放する前に、周恩来主席は、この起訴免除の理由について「二〇年先の中日両国人民の友好関係の発展を考慮して」と説明したと言う。その後、私の父は、四五名の戦犯の一人として裁判を受け、ソ連での抑留や未決勾留期間も含めて「禁錮一二年」の刑を宣告されて一年後に釈放され、帰国した。裁判では、ひとりの死刑も無期判決もなく、最高刑が二〇年で、ほとんどが満期前に帰国した。

七　おわりに

私が父の具体的な戦争犯罪を知ることになったのは、二〇一〇年七月に初めて撫順の戦犯管理所を訪ねた時である。そこに展示してあった父の起訴状を見た時、身体中から血の気が引き、立っていられない程の衝撃を受けた。父の起訴状には、「上坪鉄一は七三一部隊に中国人二二名を送った」事実が書かれていたからである。晩年、真面目に働いて子や孫にあり余るほどの愛情を注いでくれたあの父が、軍人時代に、非人道極まりない生体実験のために、こんなにも多くの中国人抗日運動家を七三一部隊に送っていたとは！

私は自分の心がバラバラに張り裂け、感情が凍りついていくような気がした。

あれから五年

私は、今年の九月、北京で行われるシンポジウムでスピーチすることになり、また瀋陽を訪ねた。瀋陽の街や撫順の戦犯管理所の中を二日間に亘ってゆっくり歩いた。その時に通訳として同行して下さった大連理工大学の周桂香先生は、日本語が非常に上手な女性であったが、山東省の出身の祖母や母は、「三光作戦」を行った日本軍への憎しみが癒えず、未だに日本人や日本語を忌み嫌っているという。周先生が大学に進学

した時期が、ちょうど日中国交回復直後であったために、大学の方針で否応なく日本語学科に所属することになり、現在も日本語を大学で教えている。それなのに、先生のお母様は娘の日本語に係わる職業がどうしても受け容れられず、母上の方から親子の往き来を絶ってしまわれたと言う。「母は孫の顔を見たいでしょうに、私の家に来てくれないのです」と、周先生は目に涙を浮かべながら、日本人の私に、この悲しい事実を語ってくれた。

私は、その後、三〇〇〇人余りの村人を虐殺した平頂山事件の跡、満州事変や日中全面戦争の史実を詳しく解説・展示している九・一八記念館、父が裁判を受けた特別軍事法廷にも行った。特別軍事法廷への階段を一歩一歩昇りながら、判決の日の父の心を想った。

判決を受ける日、父はどんな気持ちでこの階段を上ったのだろうか。

生前、父は「戦争は人間を獣にし、狂気にする」「絶対に戦争をしてはいけない！」と絞り出すような声で語り続けた。あんなに真面目で愛情深かった父と一〇〇人以上もの中国の人々を拷問にかけ、多くの抗日運動家を七三一部隊に送った父。この落差が「戦争は人間を獣にし、狂気にする」ことの証しであろう。

「戦争は、あまりにも残酷で、誰にとってもあまりにも悲しい。戦争だけは絶対にやってはならない」。

私は、改めてそのことを深く胸に刻みながら、中国を後にした。

「花子とアン」の空襲のとき我が家も

薄井　敬

空　襲

二〇一四年九月二三日放送のＮＨＫ朝ドラ「花子とアン」は一九四五年四月一五日の東京西南部の大空襲を描いていた。大森に住んでいた花子一家は、空襲の中をいのちよりも大切にしている本を抱えて逃げまどった。実は私の家も荏原区（現品川区）中延にあってこの空襲を受けた。当時二人の姉は既に福島県白河市の祖父母のところに疎開、私だけが父母の元にいた。三月一〇日の東部の大空襲で危険を感じた父母は、白河に全面疎開しようと家具(家財を荷造りし、最寄り駅にチッキ（乗車切符とともに割安で荷物を輸送する手段）で預けたその晩に空襲を受け、家もろとも灰燼に帰した。母は私を背中に括り付けて布団をかぶり、焼夷弾の嵐の中を逃げ回ったと、子どもの頃聞かされたことを覚えている。

貧乏百姓の五人兄弟の長男に生まれた父は故郷をでて上京し、様々な仕事を体験した後、クリーニング店に奉公し、何年か勤めて独立、ようやく中延にささやかな店を構えることが出来たわけであるが…。

空襲で家を焼かれたあと、親子三人は白河に疎開した。私の最初の記憶は、多分白河に行った直後だと思うが、家の前の小さな祠の前に腰を下ろしていて、近所の子どもらに囲まれて何か言われている場面と、朝起きたらおねしょをしていたことと、卵かけご飯だ。

終戦後、ゼロからの再出発となった父は単身東京に戻り、食べるのも大変な状況ではクリーニング業の再開は難しいと考え、新宿駅南口に近い、当時の鉄道病院の近くでパン屋を開店、職業軍人だったため仕事がなかった父の弟も一緒にやることになった。母は白河に残り、親戚の豆腐屋の店の一隅を借りて細々とクリーニング屋をしていた。あるとき、その日の夕食の為のお金がなかった母は、急いで洗濯物にアイロンをかけ、届けることになった。私も阿武隈川を渡った先の夕暮れのなんともいえぬさびしい山の方へと一緒について行った記憶がある。のちのち高峰美枝子の〝山のさびしい…〟(湖畔の宿)の歌を聞くとこの光景を思い出した。ご飯はコメの中に大根やソバ、ジャガイモや、黒っぽいもの(今は何だったのか思い出せない)など雑多なものが混じる雑炊が多かった。子どもたちのお茶碗にはジャガイモが入っていたのに、母のお茶碗には入っていなかったこともあった。父が東京から帰って来る時は、お土産が楽しみだった。といっても気の効いた物などあるはずもなく、ある時の土産は兵隊の帽子だった。でも嬉しくて、その帽子をかぶって近所をお披露目!に歩き回った。(誰も見ていなかったが…)

戦後の貧乏

一九四九年一二月、中野区新井薬師前駅の近くに店を開いた父は私達家族を呼び寄せた。パン屋で暮らすことになった私の歯はたちまちのうちに虫歯だらけになった!　一九五二年頃、にわかパン屋の売れ行きは思わしくなかったようで、父母は本業のクリーニング屋に戻る決断をした。叔父も一緒で、その後もしばらくは叔父一家との同居生活がつづいた(叔父はクリーニング屋を続ける傍ら、元軍人の経歴をかわれて米軍に雇われてその仕事もすることになった!)。この頃は狭い家に叔父一家と同居で、食事場所が一部屋しかなかったため、朝は叔父一家の食事が終わらないと我が家の食事はできなかった。学校へ行く時間がいつも気になり、ある時とうとう大声で文句を言ってしまったことがあり、この時はほとんど子供達を叱ったことのない母にしかられた。

暮らし向きが子供の目からも安定し出したと思えるようになったのは、戦後一〇年を経た頃からであったろうか。しかし住み込みの店員も含めて大人数の我が家のご飯はずっと麦飯で(「貧乏人は麦を食え」と言った大臣もいたっけ)、高校の頃麦飯の弁当を持って行った時弁当箱を手で覆うようにして食べていた。家が貧しくて高等小学校までしか行けなかった父は学歴に対するコンプレックスが強かったようで、よく子供達に「人間は学校に行くとバカになる」と口にしていた。小学生だった私は「大学に行かせてもらえないのでは?」と本気で心配していた。しかし、女三人男二人の子供達全員を大学にあげてくれた。後年、子供が生まれると将来の学資にと郵便貯金をしていたこと、それが戦後の超インフレと新円切り替えで元も子もなくなってしまったことを母から聞いた。私が親のありがたさを知ったのはいい大人になってからだった。

幼児の「戦争体験」を下敷きにして、六歳上の姉に連れられて映画「二十四の瞳」を観に行ったり、中野公会堂で行われた原水爆禁止の講演会に行ったりした私は戦争は嫌だという思いをはじめ社会への関心を強めていった。

父親が戦死された方や家族が戦災で亡くなったり、大きな被害を受けた方は沢山いると思う。戸山高校の同期生にもいると思う。私の父は戦場に行かずに済んだので、そういう方々に比べればどうこう言えないが、戦争が普通の市民の普通の生活を破壊するものであることは伝えたいと強く思う。

「鶴」を歌うと…

遠藤　久子

傷つき還らぬ兵士ら

三年前に九〇歳で亡くなった私の母は、死ぬまで傍らで私が歌を歌ってあげるのを喜ぶ人でした。でも、ソビエト歌曲の「鶴」*だけは、母の前で歌えませんでした。その思いを書きます。

「鶴」を歌うと二四、二五歳ころの母の姿を想像します。「私はふっと思う。傷つき還らぬ兵士ら」「あの列の中の隙間は、もしや私の為に」。

私の母は大正一一年二月に新宿区の淀橋浄水場のあった辺りで生まれました。私立の「桜井女学校」を卒業後、杉並区宿町三〇番地にあった「中島飛行機株式会社東京工場」に事務員として就職しました。

一方、父は大正一一年五月に大阪市北区で生まれ、ずっと大阪で育ちました。大柄で強肩、私立桃山中学校在学中は、野球部でキャッチャーとして活躍しました。卒業後は祖父の意向で、台湾の師範学校に入学しましたが「肌に合わない」と一年で帰国してしまいました。祖父が困って、知人の勤務されていた東京の「中島飛行機」（前述）に就職をお願いし、父は上京しました。

父と母は職場の同僚となり、相思相愛になったようで、昭和一八年に結婚しました。二人とも二一歳が目前。「仕事」も新米だったでしょうに。

ところが、父は徴兵検査で甲種合格しており、一八年三月に「赤紙」が来たのです。陸軍兵として自動車部隊に入隊しました。祖父の記録によれば、「昭和一八年八月七日。早朝、浜松駅より軍用列車に乗り込み、途中ほとんどノンストップで西下。外征の途につく（面会の際に曰く、ビルマのマンダレーに向かうと）。このこと八月九日着信のハガキにて知る」。またこうも記しています。「ビルマ派遣軍第三六二九部隊。山本中隊。其の後、時々葉書の通信ありしが、昭和一九年八月二三日の着信葉書が或いは最後便なりしか」。

戦病死の公報

これ以降、家族が安否を気遣い続けましたが、昭和二〇年八月一五日の終戦を迎えても、その消息はわかりませんでした。そして昭和二一年九月二一日になって戦死公報が来たのです。「昭和一九年八月一五日午後五時〇分。ビルマ国カンワ第一〇五兵站病院ニ於テ、マラリア兼脚気ニ因リ戦病死セラレ候條此段通知候也」と。父の出征後は、母は大阪に行き、祖父母や父の兄そして妹とともに暮らしていました。

昭和一九年からは家族が皆、愛媛の宇和島に疎開していました。祖父は父の戦死公報を受け取ってほどなく、気落ちしたのか病死しました。祖母は父の妹に大学を受験させるために、二人で大阪に戻りました。父の兄は外国航路の船乗りで、軍属で軍隊に物資を輸送しており、戦後は大阪中央汽船に勤務しました。

大阪から戻るに当たって、祖母は母にこう言ったそうです。「貴女はまだ若いのだから、実家に戻り再婚を考えなさい」と。しかし、母は一一人兄弟の末っ子。もはや実家の両親は死んでいました。祖母の言葉は母にどう響いたでしょうか。

そして、父の忘れ形見の私を、祖母が「育てる」と言ったり、母が「離さない」と言ったりで、五歳の私は大阪に連れて行かれてみたり、宇和島に留まった母の許に戻ったりしました。

母は空を見上げ、「鶴」の歌と同じと思ったでしょう。

＊ソビエト歌曲「鶴」

一　わたしは　ふっと思う
　傷つき還らぬ兵士ら
　異国の土に眠り
　いつしか　白い鶴に
　鶴は　昔から今も
　訪れては　声伝とう
　それ故か　いつも切なく
　声もなく　空見守る

二　日暮れの　霧の空を
　疲れた渡り鳥　飛ぶ
　あの　列の中の隙間は
　もしや　わたしのために
　やがて　鶴の群れとなり
　青い夕霧を　飛び立とう
　大空へ　鶴の言葉で
　世の人々　偲びつつ

大連生まれの私と周囲の人々

大場　淑子

満鉄調査部の父

一九四四年二月早生まれ、二人兄妹（後に一才半年上の従兄が加わり三兄妹となる）の末娘としてのんびりおっとりと育った私には、戦争後の間もない頃の記憶を絞り出すのは難しく、順序良く生々しく書き述べるという事は到底出来ない。たまたま私たち夫婦の双方の父親は満州に作られた国立ハルピン学院（日本の国費でそれぞれの県から一名派遣）の同期生であり、満洲鉄道の北方調査部に所属していた同僚であった。大連で生まれた私は一九四八年に日本に引き揚げてきてからの成長期に、父の友人・満鉄時代の先輩方のご家族と親しくさせていただいていたので、その家族の悲喜こもごもの事柄を見聞する環境にあった。

大連生活から舞鶴港に着くまでの四年半の間は、頭の中で五場面ほどが記憶の映像として出てくるだけで、その時代のエピソードは両親の話としてうろ覚えの記憶にとどまっている。家の中の鴨居にブランコを作ってもらって遊んでいる情景、社宅の中にあった階段踊り場に転げ落ち頭のてっぺんにこぶを作った情景。大連の家の前の厚い氷の張った広い大通りに箱ぞりで遊んでいる私やベランダで遊んでいる私たちを見ている母の顔、と他愛もない日常生活の中での一コマずつの映像以外に、夜中寝ている枕元に軍靴をはいた軍人が歩き回っている足元だけの情景、帰国時の病院船高砂丸の船中の自分の居場所（たまたま私が病弱で熱が出

ていたせいで、天井から柱のある箱形のベッドのようなコーナーが与えられていた）とたくさんの人々が雑魚寝をするような状態で集められていた畳の広い場所の情景だけが鮮明に残っている。

大連時代の我が家には父の職業柄、ロシアの軍人たちと食事をする機会があったようだ。あるとき三歳上の兄（外交的で大人を引き付けるかわいい幼児であった）を抱き上げかわいがってくれていたロシア人将校に、四歳の子が何を思ったのか彼の頬をぱちっと打ったそうだ。内気な私はその時部屋の隅に小さくなっていたらしい。頬を打たれたロシア人将校は腰にあった拳銃を手に取り身構えたそうだ。父母は真っ青になったが、その将校はアルコールが入っていたこともあり父のとりなしで事無きを得た。

その兄が父と電車に乗り市中に映画を見に行った時、父からはぐれてしまった。父は青くなって探しまわったが見つからず、いったん家にという事で帰ってきたそうだ。当時は日本の幼児が一人で歩いているものなら中国人に連れて行かれることがあり、父は家に着いたとき無事に笑顔で自分を迎えたわが息子を目にするまで生きた心地がしなかったと言っていたが、それに対して兄は電車に乗っていくような遠い所から迷子にならないで自分ひとりしっかり家にたどり着けたことを自慢している。

それでもその後、四〇歳～五〇歳になった残留孤児（中国に残され、その多くが過酷な人生を歩んでこられた）の日本人家族や親戚探しのテレビなどの放送を見るにつけ、今でもあの時は自分も残留孤児という身の上になっていたかも知れなかった、本当にならなくて良かったと言い続けている。

助けてくれた紳士

私が生まれた頃、満洲で生活をしていた父の妹家族三人が、急に同居することになった。妹の配偶者が兵隊に行ったためか、父がこの三人を引き受けたのである。そろそろ日本人にはなかなか食料が回ってこない

状況になり、母は二人のわが子以外の食料も準備せねばならず苦労をしたという。ある日、母が彼女の着物を他のものに交換しに町を歩いていると、中国人にワッと囲まれて怖い思いをしたことがあった。その時、恰幅の良い現地の紳士が間に入って彼等たちを排除し、母に気を付けて早く帰りなさいと助けてくれたと、私が高校生になったころ、その時の恐怖とそんな紳士に巡り合った幸運な気持ちを私に話してくれたことがあった。

父も生前、戦後の大連生活で得た中国・ロシア人との個々の付き合いの中で、彼らに助けられたことも多々あり、いい人は一杯いるのだがねという言葉を残していた。大連では終戦後、若い女性はみな中国人に襲われないように頭を丸坊主にして、女性と見られないようにしていたと父から聞いたことがあったので、この手記を書くに当たって、今でもお付き合い頂いている父の満鉄時代の上司のお嬢さん（私より一〇才程年上）にお話を聞いたところ、終戦後一か月は家から一歩も出ず、その後の外出時の二～三か月間は、やはり髪を切り、男性のような恰好で出かけたそうである。それでも大連は比較的治安が良かったので怖い期間は短かったという。帰国直前の大連でも、日本の内地に比べ物資がまだ豊かだったのだが、日本に持ち帰れる荷物は手荷物のみ、持ち帰る金額も制限され、ほとんど全部資産は現地に残さざるを得ない。そのため人々は少しでも多く持ち帰ろうと、何枚も縫い合わせた衣類を着、上着も重ね着をするといった状態で乗船したそうだ。夫の祖父などは少しでも多くの金を持ち帰ろうとして金歯とした。しかし。持ち物はリュックサック一つ、その中に研究者の彼にとって命と同じぐらい大事な顕微鏡を入れて来たという。気丈でしっかり者の母はいくつかの柳行李にそれぞれ均等に物資を詰めて、そのうちのどれかが日本に届けば当座をしのげるようにと船便で送った。船便など当時はほとんど届かないのが普通だったとか。

高砂丸で引揚げ

一九四八年七月に引き揚げ船高砂丸で舞鶴港の埠頭に着き、引揚者たちがそれぞれに自分たちの故郷に散っていく中、私たち家族は、父の家族の誰からの出迎えも連絡もなくて一番最後に残ってしまい、父にとって最悪の状況になっていた。皆のいなくなった晩も舞鶴で過ごし、取り敢えず母の郷里の宮崎県都城にという事で九州に。戦後にも関わらず母の実家は食べ物も十分、住居も贅沢なほど広いという事もあり、父はそこに落ち着いてもよいと母に言ったそうだ。気丈な母はなんと情けないと父を奮起させ、半年ほどの都城の生活を捨て、父の実家である名古屋に帰ることになった。

名古屋に戻ると、戦時中連絡がつかない間に父の両親、兄はすでに亡くなっており、三千本もの梅の木があったという覚王山の実家も、他に持っていた家作も名古屋の大空襲で焼きつくされ、辛うじて父が若い時結核の療養のために過ごした家が残っていたのは私たち家族にとっては幸運であった。しかし、祖父たちの所有していた農地などは父の帰国が遅かった為に不在地主の状態で近所の人々が使用し、ほとんど二束三文で手放さざるを得なかったらしい。僅かに残った農地の地代はさつま芋であった。

名古屋で生活をし始めた戦後四年目の頃はまだ物不足であった。当時五歳だった私には一才半年上の従兄が我が家に引き取られ、年子の三人兄妹となった。父は私に「ちいさい兄さん」と呼ぶようにと強要した。しかし私には受け入れがたく、逆に拒否する気持ちになってずっと愛称で呼ぶことになった。母にとっては、わが子以外に七歳の子供を分け隔てなく育てることは容易ではなかったと思う。後々母は二人の自分の子供がこの子のために後ろ指を指されることの無いように必死だったと言っていた。この兄は肋骨が呼吸困難から鳩胸に変形するほど重症の小児喘息の病を抱えており、発作が起きると傍で見ていても苦しくなるほどで母も付きっ切りで看病していた。後々当時の生活費の半分が薬代に消えて大変だったという苦労話も聞いた。

彼の喘息は中学生のころには姿を消していたように思う。母が大連から送った船便は、忘れていた頃に全部届いたので、それによって随分と生活が助けられたと言っていた。父の療養用の家も裏庭があり、鶏を飼っていたり少しの野菜を作っていたが、思い出に残るのは、宮崎高女を卒業し、満鉄で父の上司の秘書勤めをしていた母が、薪で沸かすお風呂の為に大きな斧を振りおろし、薪割りをしていたことである。「冬の寒い時など体を温める為には薪割りは最高だったわよ」との母の言葉が耳に残る。

中一で東京へ

中学校一年の五月、父の転勤で住んでいた名古屋の家を売り、東京の原宿に移り住むことになった。父母の仲人役を引き受けて下さった満鉄時代の上司（前述）のご家族が、当時三重県桑名に住んでおられた。その上司は戦犯としてシベリアで抑留生活を送られており、桑名で母と姉妹の母子だけの生活だった。名古屋時代、そこへ両親は私をよく連れて行ってくれたので、私も親しくさせて頂いていた。上京してすぐの頃だったと思う。当時ラジオで尋ね人や外地からの帰国者名を放送する番組があり、私もラジオから聞こえてくる名前に毎日耳を澄ませていたものだ。ある時「T・K」私の耳ははっきりとその名前を捉えた。すぐさま私は小躍りして、台所にいた母の所に桑名のおじ様が日本に帰って来られる、と報告した事を今でも思い出す。最近その下のお姉さまとお話したが、抑留生活は相当辛いものであったようだけれど、シベリア生活の事をご家族にはほとんどお話にならなかったようである。私が大学を卒業した年、母と二人で東北旅行をした時、仙台の大学で教えておられたおじ様を訪ねた。柔和なお顔でじっと私をご覧になり、私に話しかけられる言葉は、もの静かでゆっくりととても暖かであった。その時はおじ様は耳が遠く、片方の目が見えない状態だったので、私はおじ様の見えない方の目を見てはいけない気がして、見える目の方を見ながらお話ししようと

気を集中するのに一生懸命だった記憶がある。退職されて桑名のお子さまの処に戻られた時は両目両耳とも見えない聞こえない状態になっておられ、抑留生活があまりにも過酷だったことが伺える。

父のハルピン学院の同期生の友人の一人も憲兵であったことから、この方もシベリアに一〇年以上の抑留生活を送っておられた。奥様は母子家庭として生活をしておられたが、洋裁、編み物の腕を生かし、逞しく生きておられた。私の両親は女手一つで、よくやっていると感心しながら話しているのを私は聞いている。その友人がシベリアから帰国されてからも、家族ぐるみで互いの家を行きする親しい間柄であった。このシベリアには五七万人の日本人が送られ、五万五千人が当地でなくなられている。極寒の地イルクーツクにあるたくさんの二階建て以上のレンガ造りの建物などは、この抑留者の無償の労働力で建てられ、ロシアは、当時民主化思想を日本人に植え付け、その思想を受け入れた者から帰国させていた。また日本人同士の吊るし上げや自分以外の日本人の反省点を報告させるなど精神的な人間破壊をさせたという報道が、最近ＮＨＫのドキュメンタリー報道にあった。

夫の祖父の体験

夫の母方の祖父は戦前は満州国博物館部長、戦後は中華人民共和国の国立東北大学教授として迎えられ、夫の父親の家族は結婚前から大陸生活をしており、何人もの中国人を雇用していた。そんなことから終戦直後の混乱期には中国人の学生や雇用人にいろいろと助けられたそうである。ここで私が夫の祖父の戦時下体験を書きたいと思う。それは、戦争によって人類の歴史の貴重な資料がいとも簡単に藻屑と化してしまうという悲劇もあるという事である。詳しくは遠藤隆次著の「原人発掘」に書かれているが、以下に原文を部分的に引用する。

＊　＊　＊　＊

ソ連の宣戦布告

忘れもしない八月八日の夜十一時、ラジオがけたたましい叫び声をあげた。「沖縄基地のＢ二十九、十数機からなる編隊は、ただ今新京に向かって来襲中。全員退避せよ。」（略）午前三時ラジオが再び突然叫んだ。「沖縄基地より米機が来襲したというのは誤り、昨日まで中立を言明していたソ連は九日午前零時、日満両国に対して宣戦を布告。目下満洲里、黒河、綏芬河と西、北、東三方面の国境を突破。航空、戦車両部隊を先頭に新京に向かって進撃中。全日本人は結束して奮起せよ」（略）

八月九日の朝は白々と明け、太陽はいつものように私たちに一日の開始を告げた。するとさあ大変。実にこの日から数日間の在新京日本人の有様は、蜂の巣を突っついたってクモの子を散らしたって、こうはなるまいと思われた。日頃の秩序・規律はまるきりどこかへ消し飛んで各人各様、われ勝ちに慌てふためいて避難し始めたのだ。何よりも肝心の関東軍司令部と満洲国首脳部がまっ先に民衆を放り出し、通化で決戦とかのお題目を並べ立てて逃亡したのだからお話にならない。

民間人の足は完全に宙に浮いてしまった。ほとんどの者が着のみ着のまま奉天、通化、安東、それから朝鮮へとまるで朝鮮海峡を歩いて渡る勢いで逃げ出した。現に私のいた南嶺徳昌路には、約八十軒の日本人が住んでいたが、それが毎日クシの歯が抜けるように空き家になり、数日後には私の家を含めて四～五軒が残留するに過ぎなかった。「思いぞ起こす過ぐる昭和六年九月十九日の朝まだき、奉天北大営の戦闘におどろき、あわてふためいた中国人の大群衆が算を乱して逃げ出した。あの千代田通りの悲惨な有様……それが今はわが身の上なのだ」（略）

逃げて下さい

ぼんやり庭先を眺めているところへ、口ごろ目をかけていた李という中国人が、どこで手に入れたか一台のトラックを持って飛び込んできた。「先生、いつまで腰を抜かしているのですか。ぐずぐずしていると、命が亡くなります。さあ早く、奥さん娘さんともどもそれに大事にしておられるシャレコウベなど、全部この車に積んでください。日頃の恩返しに私がお供します」私は感激で胸がいっぱいになった。（略）取り残され形で少々心細くなってきているさいである。それにトラックもあれば、標本類の運搬もできる。李の行為は神の救いと思えた。「よし逃げ出そう」と私は決心した。しかし折悪しく、日ごろ病気がちの妻は数日来の心労も加わって、その日も病床にあった。（略）

妻はじっと私の顔を見ていたが、やがて手を伸ばして私の手を握り、力なく首を振った。「この期に及んで逃げようとしても、私の今の健康状態では、十キロだって逃げ伸びることなど出来そうもありません。私はこの家で静かに運命を待つことにします。どうかあなたと娘だけで逃げてください。これがお別れになるでしょうが…」あとは涙を流すばかりである。「こうなれば三人仲良く最後までこの家でがんばろうよ。死ぬときは一緒だ」こんなわけで李のトラックはとうとうそのまま帰ってしまった。しかしあとで分かったことであるが実際、人の世の幸不幸はあざなうナワのごとし。当時新京はもちろんハルピン、奉天などから逃げ出した日本人は、多数集団のものはだいたい無事だったが、少人数のものは、ものの十キロもいかないうちに中国人の無頼漢におそわれ、一物も残さず略奪されたばかりか命を奪われた者も多かった。もし私たち一家が李のトラックで逃げていたら、少なくとも男の私と病身の妻は、問題なくあの世行きさせられていただろう。そう思うとあの時妻の病気こそが私たち一家を守ったことになる。

〈筆者はソ連軍が新京に侵入して来るのを徳昌路で食い止めるための陣地として我が家を明け渡し、その直後に専売公社の社宅で終戦を告げる国の御声を聞くことになった。〉

満州国立中央博物館の破壊

「先生大変です。新京の町ではすでに昨夜から日本人に対する略奪が始まっています。それに博物館がやられたという事です。心配ですからお知らせに上がりました。」（四キロの道を息せき切って博物館に駆けつける）惨また惨、何たることだ。これは！中央ホールに威容を誇っていたマンモス象頭骨化石と二本の大きなキバは、木端微塵に打ち砕かれて、跡形もなくなっている。ホルマリン漬けの標本は手当り次第に放りだされ、ガラス瓶が割れてホルマリンの刺激臭で日もあけられない。（略）

文字通り足の踏み場がない。よくもこうまで念入りに荒らしたものだ。思わずよろよろして傍の柱にもたれかかった時、私の目から涙がこぼれ出した。私は初めて「敗戦」を泣いた。在満二十四有余年、遠く満鉄教育研究所付設教育参考館から準備処を経て、満州国立中央博物館自然科学館へと、多くの人々の協力のもとに満身の力をふりしぼり、高い理想を掲げて築きあげて来た半生の所産は、一瞬にして、無知暴民たちの手により破壊されてしまった。（略）

北京原人は太平洋戦争突発とともに失われた。（略）戦争は終わったが、物騒さには変わりない。（略）しかし幸いなことに、私の家は暴民の訪問を受けることなく過ぎていった。九月上旬になるといったん新京から逃げ出した日本人もぞくぞく舞い戻り、そこへ北満方面から同胞の難民がどっと流れ込んできた（ソ連兵の進駐である。）

ソ連兵の略奪

その時一番最初にソ連軍が日本人に申し渡したことは「もし日本人がソ連兵の一人を殺害したことがわかったときは、その犯人の近所に住む日本人二百名を銃殺に処す」という軍令（？）であった。（略）初めは知る由もなかったが、一両日たつとその真意がすぐ読めた。それは彼らの日本人に対する略奪を安全

うだが、食べても消化できなかった。死んだ子供の土饅頭の上のお握りを奪い合う年長の子供を羨ましく思った私は、朝鮮人のオマニの腕に抱かれて、小学唱歌を歌ってお握りをせしめる芸を覚えた。

ソ連兵には囚人兵も混じり、軍律もなく日本人に略奪、乱暴を働く者も多かった。姉は短機関銃（マンダリン）で殴られ顔に傷を負い、よっぽど怖かったのか、それから三年間笑わなかった。内地に引揚げて随分経って父が買ってきたラジオから音楽が流れると初めて微笑んだ。

日本に脱出することになった。平壌辺りの幾分かは無蓋車で、残りは徒歩。深さ一五センチの川でも死者が出た。ソ連兵と朝鮮人の保安隊に見つからぬよう、小集団に分かれて南下。声を出す子供は置き去りや、もっとひどい仕打ちが待って居た。封鎖されていた三八度線を踏破して、開封の米軍キャンプに辿り着き、救出された。

私は部隊で最年少の生存者になって居た。子供を失った母親たちの咎めるような眼差しと、「次はこの子だ」という囁きが怖かった。引揚船で博多に上陸した三歳の私は、当時の二歳児の平均身長・体重に遥かに及ばなかった。後年、母は栄養失調で腹だけ膨れ上がり骨と皮だけになったアフリカの子供をテレビで見付けると涙ぐんで「あの頃のお前はあんなんじゃったんよ」と呟いた。

小学校の入学式で最前列に整列して居た私は、壇上の校長先生から「坊やはお母さんの処に戻りなさい」と諭されて、「僕は一年生です」と答えた。平均身長に達したのは大学四年生の秋。

引揚の苦労を忘れまいと八月一五日は終日、麦飯と沢庵だけだったが、平素、両親は「いざという時に日頃の栄養摂取が生き抜く力に成る」とエンゲル係数の高さを気にしなかった。そのお蔭で大病にも耐えてこの歳に到った。

身近かに見聞きした戦中・戦後

菅野　尚子

私の戦中・戦後

私は、昭和一八年一二月に、現在の北区で第一子長女として出生。父母は、戦争中の生活のことをよく話していた。その当時は、またかという思いで聞いていたが、はや七〇歳を越していざ書くとなるとその記憶も怪しくなってきた。聞こうにも父母は、他界。

その中で記憶に残っているのは、昭和一九年一二月ひと誕生を過ぎたときに、母と二人母の実家のある福島県に疎開した。その時のエピソードとして母は、郡山の駅でモンペを履いていないことを注意されたという。福島県の田舎町にも頻繁に機銃掃射されるようになり、叔母（当時小五年）が、私を背負って避難するのが役目だった。母の実家の壁には、機銃弾が撃ち込まれた跡が残っているが、一瞬のことで私は、助かったという。

我が家では、父は、召集されたがすぐに終戦となり、引き続き東京で勤めていた。当時食糧事情が悪く、栄養失調を心配し、父も疎開。一緒に生活したが、田舎での勤務に飽き足らず、ほどなく父だけ東京に戻った。昭和二六年（小学二年）戦後初めて建った鉄筋コンクリートの4階建の官舎に入居できたのを機に母と私妹も上京した。

転入当時、校舎が不足していて、二部授業だった。午後の授業のときは、給食から始まった。その給食の脱脂粉乳、どうにも好きになれず、「いただきます」というと同時に一気に飲み干していた。

クラスには、お父さんが戦死した人、お父さんが戦死し叔父さんが継父という人もいた。

自宅近くの恵比寿には、駐留軍のキャンプがあり、外国兵や兵と一緒にいる女の人をみかけた。級友が、「誰さんの家に下宿している女の人は、『夜の女でオンリー』なんだって」と言っていたが、外国兵と一緒にいた女の人とは、当時結びつかなかった。

中学の校舎は、元のかまぼこ型の兵舎で、廊下を挟んで教室があり、一クラス五〇人位で一三クラスあった。当時復員した先生がおられ、戦争の悲惨さを語っておられたことは、頭にうっすらとあるが、その内容は、今は、もう思い出せない。最近、友人が「社会科の宿題で、憲法の前文を暗記させられたわよね」と言っていた。私は、残念ながら覚えていないが平和教育がなされていたと思う。

街や駅頭には、傷痍軍人がアコーデオンを弾き物乞いしているのを見かけた。今考えると戦争の犠牲者で気の毒な人達なのに子供心になぜか気味が悪くて、見まいとした。

私が、『写真のおじちゃん』と呼んでいた母の兄（大正六年生まれ）は、ガダルカナルで昭和一八年一月に戦病死している。母の弟（大正一四年生まれ）は、旧制中学四年終了で陸軍士官学校に進み、配属が決まったが、直後に終戦になったとのこと。入隊前に一時帰宅したときの記念写真が残っている。時勢もあったのだろうが、貧しかったので官費で進学できるところというので陸士を選らんだようだ。

九条の会

私は、身近な見聞や映画、マスコミ等から戦争は、漠然と大変なことだと思っていたが、具体的なイメージは、持てていなかったように思う。

私が七年前から、手伝いしている地域の九条の会で、三年前『我が町　国分　国府台「わたしたちの戦争体験」』をまとめた。二〇代で幼子を抱え外地から引き揚げてきた我々の親の世代の女性や、子供として引き揚げの体験や終戦直後の生活を語る私達より少し年上の女性、多感な青春時代軍事教育を受けた八〇代の男性、少年兵として戦争に加わって八〇代の男性、戦地に向かう前にあった兄や父との思いを綴った男性、東京大空襲の体験を語る人、わが町（今でこそ、文化、文教都市と言っているが、陸軍の町だった）生まれ育ち、町の様子、戦時中の体験を語る八〇代の女性、戦死した親への思いを詩にした同年の女性等など身近にいる人たちの原稿をパソコンに打ち込んだり、聞き取りをしたり、町内にある国立病院の歴史（精神を病んだ兵士を治療する陸軍病院）をまとめたりすることを通して、戦争の悲惨さを実感した。またガダルカナルから生還してきた人の話を聞き「写真のおじちゃん」で戦死した事実以上の思いはなかった伯父のこともリアルになってきた。たまたまこれを書くに際し、八十四歳になる母の弟に電話したら、戦死した伯父と戦地に行く前に食事をしていたときに「こんなふうに食事がこれからもできるといいな」と言っていたのが印象に残っているという。その叔父の妻は、戦後見た映画「初めか終わりか」（原子爆弾の製造から投下までを描いたドキメンタリー）のパンフレットを持ち続けていたという。以前彼女が、昭和史を描いた写真集の広告をみて、孫たちに戦争の悲惨さを伝えるのに買うと言っていたのも思い出した。

改めて聞かないと語らないが、あの時代を体験してきた人たちの多くは、戦争が二度と起きないことを願っていると思う。

どんな理由があろうと、戦争は、殺し合いである。勝っても負けても犠牲者が出る。六九年間一人の戦死者も出さず平和を守れたのは、憲法があったからこそ、それをなし崩しにして、「戦争をできる国」にして

積極的平和主義などというのはとんでもない。どなたかが、今の若者にとっては、太平洋戦争も我々にとっての日露戦争や日清戦争のようなもので遠いものだと言っていた。そういう若者たちにいかに伝えるかは、難しい。微力ながらもそれぞれができることをし続けるしかないと思う。

最後にASさんからの聞き書きを載せます。

＊　＊　＊

ASさんからの聞き書き

私は、市川で生まれ、八五歳の現在まで市川以外で暮らしたことはありません。

昭和一五年、卒業式の前から、父に言われるままに父が勤めていた市川駅近くにあった小沢眼鏡工場（現在、門のみが残り、駐車場になっている）で事務員として働いていました。昭和一六年、太平洋戦争が始まると、今は、文化会館になっている所の近くに八幡工場ができました。そこは、中島飛行場の軍需工場で飛行機の部品を作っていました。戦争が激しくなると本工場でも飛行機の部品（ねじ）を作るようになりました。昼間は、事務を、残業では部品づくりをしました。八幡工場では、青年学校の生徒が勤労動員で大勢働いていました。

給料日には、上司と硬貨が詰まった重い袋を抱え、当時、本八幡駅の南口はなかったので、高架橋を渡り、工場に届けていました。

戦争が始まってすぐに、米国の偵察機が来ました。弟は、「飛行機には、☆マークがついていて、青い目の人が操縦していたのを見た」と言って家に駆込んで来ました。金町にあった省線の車庫を狙っていたらしいのですが、市川でも根本で防空演習中の妊婦さんが機銃掃射にあたり亡くなったと聞いています。

戦争当時、我が家は、両親と長女の私を頭に五人の子の七人家族で、国府台駅の近くに住んでいました。

最初の頃は、縁側の一部を切り取り縁側の下を防空壕代わりにしていました。その後、庭に防空壕を掘りましたが、真間川の近くなので三〇センチも掘ると水がでてきていました。そこでりんご箱に土を詰めて囲いにして空襲警報がなると入っていました。今考えると何の役にも立たなかったと思います。

父が召集されたのは、終戦の年の春でした。四十二歳の小柄で肋膜を患ったこともある父までも招集されるのだから、「戦争に負けるね」と家族で話していました。父は、最初国府台の部隊におり、牛蒡剣を下げ、家族に会いに一度だけ来ました。その後、茨城県の石岡の部隊に配属になり、土浦の少年兵と一緒に作業をしたそうです。「若者が、重い荷物を運んでくれたので助かった」と話していました。

東京の空が真っ赤に

三月一〇日の東京大空襲のときは、東京方面の空が真っ赤に燃えているのを物干し台から見ました。翌日、出勤すると、市川橋を渡って避難してくる人の列がゾロゾロ続いていました。顔が真っ黒に焼けている人、死んだ子を背負っている母親など地獄絵を見ているようで、今も脳裏に焼きついています。国道一四号線沿いにあった映画館（三松館）は、遺体安置所になり線香のにおいがただよっていました。

東京大空襲後も空襲がたびたびありました。八幡の工場は、狙われ、その周辺の田畑には、焼夷弾の不発弾が突き刺さっていました。市川工場で若い職工さんが不発弾を拾ってきて火をつけたために焼夷弾が爆発しました。破片が心臓にあたり即死した人、両足が吹っ飛んだ人、あごが飛ばされた人など、三人が亡くなりました。同世代の弟も同じ工場で働いていたので心配しながら、私は、夢中で傷の手当にあたっていたのですが、途中で気絶して、気がついたときにはソファーに寝かされていました。その日は、三月二二日で私の一九歳の誕生日だったので、強く印象に残っています。幸い弟は無事でした。

当時は「お国のために死ぬのは、怖くない」という教育がなされていたと思います。三歳下の弟も、終戦

になり実際には、入隊しませんでしたが、戦車兵を志願していました。上司の息子さんは、海軍に志願し、出征後まもなく戦死されました。その報を聞いて、白絣の着物に袴姿で挨拶に来た姿を見ていただけに思わず泣いて、上司に叱られました。その上司が息子さんの写真の前で涙をこらえていた姿が目に焼きついています。当時、新聞に特攻隊の人達が出撃する前に残した辞世の歌が載っていました。同世代の人達の気持ちを想うと切なくて書き写していました。今も残してあります。

戦争が早く終わればという思いよりも、仕事をするので精一杯でした。父が厳しくて、会社の旅行にも参加させてもらえなく、休みには家の手伝いをさせられ、外に遊びにも出してもらえなかったのです。人と話す機会も少なかったので人に話す代わりに日記をつけたり、短歌を作っていました。

寅年生まれの私は、「虎は、千里行って千里帰るので縁起がよい」と言われていたので、七歳の頃から知らない人にも頼まれて随分千人針を縫いました。丸印がついた晒に年の数だけ赤い糸で玉を結びつけるので大変でした。そのうち適当な数でよいと言われました。最初の頃はひとつ玉を作っては、糸を切っていましたが、そこにしらみがつくというので続けて玉を作るようになりました。満州事変の頃から縫っていましたが、逆に戦争が激しくなってからは、頼まれることも少なくなっていました。始めの頃は、戦争が遠い感じでしたが、だんだんに、会社の人や知り合いの人が出征して亡くなったという話も聞くようになりました。

軍人の町、市川

市川は、軍人の町で、商大のところに歩兵隊、赤レンガのところには偉い人がいる師団本部、中国分の辺りは、東練兵場、三角山には射撃場、今のスポーツセンターや消防署の辺りは、西練兵場でした。国府台病院は、軍の病院で一般の診療はなく、里見公園の駐輪場あたりには、窓に鉄格子の入った精神病棟がありました。国府台駅周辺には、カフェや料亭が数軒あり芸者さんもいました。国府台駅近くの今お茶屋さんがあるところは、面会に来た人達のお土産屋さんでした。当番仕官が見廻り、兵士が入っていないかとカフェを覗いている姿も見ました。新兵が、道路で仕官に会うたびに敬礼をするのを見て大変だなと思っていました。

中には威張っている軍人もいて、工場に来ては、私に「お嬢さん」「お嬢さん」と声をかけ眼鏡をせびっているような人もいました。

玉音放送は、会社の前にあった家の庭（今、川瀬医院のあるビル）で聞きました。それまでラジオから聞こえる大本営発表の日本軍の戦果を信じていたので玉音放送を聞き終わっても戦争に負けて終戦宣言という事が信じられず、全員呆然と立ちつくしていた様に思います。

その後、会社は解散その数日間の出来事は今考えても何も思い出せません。その二ヵ月後には、別の会社で働く様になりました。

参考『わが町　国分　国府台　わたしたちの戦争体験』（こうのだい九条の会　２０１１年９月）

人さらい

狐崎　晶雄

戦災孤児・傷痍軍人…

筆者がもの心ついたころ（四歳ころ、一九四八年前後）、道にはときどき二～四人のみすぼらしい服の子供の集団があてもなく、とぼとぼと歩いていました。ようやく歩けるようになった二、三歳くらいから大きい方は一二歳くらいまででしょうか。「浮浪児」と呼んでいましたが、戦争で家も両親もなくした子供たちです。我が家にもときどきそういう浮浪児のグループが訪ねてきました。両親もいて、家があっただけ、筆者はそういう子供たちに比べれば幸いでした。両親は、かわいそうだと言って自分たちだけでも不十分な食べ物を分けて子供たちの持っていた汚れた袋に入れてあげていました。そういうときは我々の食べ物も少なくなってしまうのですが、そういうのが当然だと思っていたので、不満に思うようなことはありませんでした。いまでも、あの子供たちは今どうしているだろう、と思うことがあります。

「傷痍軍人（しょういぐんじん）」もご存知ないでしょうね。軍隊で手や足を失うなどの大けがをされた方たちです。駅の出口付近にはたいていこのような方が白い服を着て軍隊の（カーキ色の）袋を持って、通り過ぎる人たちから募金をしていました。偽者も沢山いたようですが、ずいぶん後まで、一九六〇年代までも見かけました。

このような目に見える戦争の影響のほかに、父親が戦死して母子家庭になった家族が無数にありました。戦死者数の半分以上あったでしょう。父親が戦争で亡くなって、母親だけで乳飲み子を育てていましたが、そのご苦労は計り知れないと思います。小学校のときからずっと同級生の中に母子家庭の友人は沢山いました。普通に見ていただけでは分かりませんから、そういう友人は筆者が知っているよりずっと大勢いたと思います。新聞配達で家計を助けている友人も何人もいました。

表面には出ない、同じように長期にわたる影響、後遺症はほかにもあります。そのひとつですが、都会にいた家族は空襲を逃れるために都市部から遠いところに引っ越しをしました。疎開（そかい）といいます。疎開した先が危なくなって何回も引っ越しをする家族もありました。父親は軍隊ですから、そういう引っ越しは母親だけでしなければなりません。筆者はちょうど一、二歳で、一つ上の兄と幼児ふたりを連れて何回も引っ越しを繰り返した母は、ついに結核に侵されてしまいました。もの心ついたあと病気の母しか知りません。七歳のときに母は亡くなりましたが、戦争がなければ元気な母と暮らしていたはずです。

食糧事情もよくはありませんでした。最悪と書きたいところですが、世界の難民キャンプなどをみるともっとひどいところもあるので、そうは書きませんが。お米はめったに食べられず、いつもお芋の配給があって、長い行列をしていました。お芋もなくなって、一週間たべものは片栗粉だけ、ということもありました。鍋いっぱいにお湯を沸かしてカタクリ粉を入れてかき回しながら全部が透明になるようにするのですが、かたまってくると鍋ごと回ってしまって、全体に火が通るようにするのは大変でした。また、空き地にじゃがいもを育て始めたこともありましたが、大きく育つまで待てなくて、小さな芋を掘り起こして食べたことも記憶に残っています。

自分の経験ではありませんが、新聞にこんな悲惨な話も載っていました。食べ物がなくて幼い弟の牛乳を

盗み飲みしていた。その弟は栄養失調で亡くなり、その責め苦を背負い続けて生きている、という人の投書です。その時の状況と、この投書をした幼ないお兄ちゃんだったひとの後悔、苦悩を想像できますか？。戦争をすれば、こういうことが実際に起こります。

戦争＝殺人とトラウマ

父を含めて軍隊にいた身近な人が何人もいますが、だれも戦争の話はほとんどしませんでした。一人も直接殺したりすることはなかったと聞いていますが、それでもいやな記憶を思い出したくないのだと思って、聞くこともしませんでした。父は職業軍人でしたが、八月一五日には「終戦記念日ではない。敗戦記念日なのだよ。」と毎年言っていました。大人になるほどこの言葉の意味の深さが分かってきました。叔父の一人は自分の肩を貫通した弾が後ろにいた友人にあたって、その友人は戦死してしまったそうです。ほかの叔父は婚約者がいたのですが中国で戦死。婚約者はその後結婚しませんでしたが、親戚のみんなは戦死した叔父の未亡人として、親戚の一人としてお付き合いしていました。もう一人の叔父は海軍の特攻隊に配属されて来週出撃というときに八月一五日の敗戦宣言になり助かりました。でも、三〇歳前なのに頭髪が全部抜けてまる坊主になり、六五歳で亡くなるまで頭髪が回復することはありませんでした。特攻隊のみなさんの精神的ストレスの大きさが分かります。もう一人は退職後に戦争の時に一緒にいて戦死したりけがをしたひとの住所を調べてお墓参りに全国に行っていました。そのように戦争に行ったかたがたは、たとえ生きて帰ってくることができても、人を殺しあるいは人を傷付けてしまったことを一生忘れることはできません。一生を目立たないように生きていたのです。これは戦争に負けたからではありません。たとえ勝っていても、たとえ自分自身が殺していなくても、殺人の一端を担ったという記憶はトラウマとなって残ります。

「いっちゃだめ」

最後に。あまりのことだったので、無意識のうちに自分で忘れようとしていたのだと思います。思い出したくない事件です。友人たちの文を読んでいるうちに思い出したので追加することにしました。それは「人さらい」です。この言葉も死語になりました。平和な世がいままで続いていたのだと改めて思います。子供をさらっていって、誰かに売りつけて金を稼ぐことです（驚いたことに米国ではいまでも「人さらい（幼児誘拐）」が多発しています。カリフォルニアの牛乳のパックは行方不明になった子供たちの写真が印刷されていて、さらわれた子供たちを探す手段になっています）。この人さらいが日本にも終戦直後にはあったのです。

上記のように筆者の母は結核にかかってしまい、しばらく入院していたことがあります。そのときにさびしくなって一つ上の兄と二人で表の通りに出て泣いていたら、通りかかったおじさんが病院に連れて行って母に会わせてあげる、と言ったので、見知らぬおじさんの自転車に乗ってしまったのでした（荷台の大きなかご。二人でも入れた）。兄は片目が不自由だったので、*売れないから残されたのだと思います。兄が「いっちゃだめ！」と大泣きしながら捕まえていてくれました。が、大人の力には対抗できませんでした。弟（筆者）が連れて行かれてしまった、大変だとわーわー泣いていました。そこに運よく自転車の父が帰ってきて、すぐに見知らぬおじさんの自転車を追いかけてくれました。「その子を返してくれ」「どうしてだ」「それは私の子だから」という会話を聞いたような気がします。軍人で腕には自信のあった父も腕力には訴えなかったのです。上記のいきさつも自分では覚えていません。あと一〇秒、父の帰りが遅かったらもう行方不明で、いまの筆者はなかっただろうと思います。あるいは、もし兄も一緒に連れて行かれてしまったら、父には何が起こったか分からず、追いかけてとりもどしてくれることもなかったかもしれません。本当に奇跡的に助かったのだと思います。これは小学五、六年ころになって父がこういうこともあったね、と話してくれたの

で記憶に残っているのだと思います。そのときに、どうしてなぐりかからなかったのかと父に聞きました。「あのひともかわいそうな人だった。戦争で狂わされてしまったのだから。」という答えでした。言葉のやり取りだけで返してくれたのは、そんなに悪い人ではなかったからでしょう。でも、こう書いているだけでも心底ぞっとします。戦争になるとこういうことも実際に起こるのです。戦争は前線の兵士以外の町の人々をも狂気にしてしまうのです。

＊　戦争中、水不足、燃料不足で産院の産湯も入れかえできずに汚れた湯から細菌が左目に入って失明しました。これも戦争による被害です。兄が片目で残されたから助かったのかもしれない、ということは今回この原稿を書いていて初めて気づきました。

国を守るのは叡智

戦争はいつでも自分の国を守るため、平和のためと言って開始されます。その教訓を忘れてはなりません。戦争の準備をすると、それを使いたくなるから危険なのだ、と戦争経験者も言っています。それだけではありません。過去に日本に侵略された国々は日本の軍備増強を見て危険を感じ、日本に対する軍備を増強するでしょう。抑止力という考え方は軍備増強の際限のない競争を招きます。確実に日本のリスクは高まるのです。「国を守る」という言葉から「軍備」に直結することは間違っています。国を守るのは軍備ではなく英知です。。戦争もやむを得ないというような狂気の状況を事前に防ぐ叡智こそが本来の政治であり、国を守るのです。ベトナムでは強大な軍事力を持っていた米国が負けました。イラクやアフガニスタンなどでも軍事力で勝てないこと、そして戦争が新たな戦争を生むことを証明しています。あの巨額の軍事費を最初から平和目的の経済援助に使っていたら、生活レベルが上がって今も戦争が続くようなことにはならなかった、

という可能性は大いにあるでしょう。

戦争しない日本を維持するために個々人が少しづつ時間を割き、すこしづつ費用も分担しなければいけない状況になってきたと思います。戦争を招いたのは、政治に無関心で善良な市民だったという分析もあります。一九四五年まで二一〇万人の死者を含めて八千万人の全国民が身に染みた悲惨さを繰り返さないように、叡智を絞り続けたいものです。

戦後七〇年に考える——かつてアジアで唯一植民地支配をした

木村　宏一郎

戦後七〇年にこれと言った戦争体験が思い出せないが、大事な取り組みと思い以下述べたい。

僕が小学校一年生まで生まれ育った渋谷。生まれたのは戦争中だが、戦争の記憶が欠落している。ただ渋谷も空襲により一面焼け野原で、今と隔世の感がある。ポツンと東横百貨店の建物が黒く焼けて残っていたように思う。その渋谷駅周辺には、義足や義手の傷病兵が募金を求める姿もあった。進駐軍相手の靴磨きやパンパンと呼ばれた女性たちの姿も身近にあった。何より子どもの僕は紙芝居の綿菓子や、たまに貰うアメリカチョコ菓子、ときに叔父が文明堂のカステラ…。あまり戦争に関係ないか。

戦争に向き合う

むしろ、日本のかつての戦争と向き合ったのはずっと後で、それも社会科教員になってからである。ある時同僚が一つの資料を教材にと、本多勝一の大石橋「万人坑」(『中国の旅』)の記述を見せた。民間企業が「満洲」で三〇年余に渡り、中国の労働者を強制労働させて、その犠牲者を「捨てるように」埋めた一万七千余と推定される「ガイコツ」の山をいう。「生きたまま」、「足を針金」で縛られて埋めたガイコツも。軍や戦時だけでない、日本の加害の主体が民間企業であるということに遅ればせであるが、気がついた。それから「毒ガス人体実験」や「中国人少年を生体解剖」した七三一細菌部隊。熊谷組が戦争中に強制連行してきた中国人労働者が「相模湖ダム」建設での「殉難」死、などを教材化した。

以上の問題意識を十五年戦争が関わる全ての地域・住民を視野に、そしてベトナム戦争から経済「侵略」に至る今日までを纏めたのが『資料　生徒と学ぶ日本のアジア侵略』である。このような仕事が歴史教育として過去のモノになる日本になるはずであったが…。

いや、「過去のモノ」などと軽々に侵略・加害した日本人が言うことではないと改めて思い知らされたのは、二〇〇七年夏「旧満州」の歴史跡など現地を旅してからである。あの有名な満鉄「あじあ号」も大連に保存されていたが、大石橋市には「虎石溝萬人坑紀念館」が整備されて「骸骨」と上坑の中の骨がむき出しで見られる。「市級文物保護単位」の石版も。「満洲」を語る時、欠落はできない施設だと改めて…。

ハルピン市には侵華日軍第七三一部隊博物館が当時の本部の建物を残して整備されている。入り口には日本語の案内版も。ボイラー室、凍傷実験室、伝染病をうつすノミを寄生させるためのネズミ飼育室などの跡が残っている。後世への「忘れぬ」ための啓発教育施設としてきちん見学できるよう整備されていた（その後二〇一五年八月一五日、「細菌実験室」「特設監獄」の遺構の公開、「残虐行為を視覚的」に理解する工夫などより新たに広げて開館したという。金館長は「百聞は一見にしかず。ぜひ多くの日本のみなさんに……」と）。この部隊名の数字をつけた訓練機に笑顔で得意気に乗った日本の首相がいたのでは？

植民地支配の加害の歴史

このような自らの加害の歴史事実に向き合わず、その歴史的な責任を感じないというのは、日本人としてだけでなく、今日の世界では人権意識の欠落を疑われるというのが戦後七〇年の今の世界ではないだろうか。

いや現地を訪ねてもう一つ学ばされたことがある。

それはやはりハルピン市にある「東北烈士紀念館」である。その展示の詳細に今ふれる余裕がないが、建物自体がかつてハルピン「警察庁」でその「罪悪」の展示がある。とくに「偽」満洲支配に抵抗する多くの抗日活動家を拷問にかけ、殺害した。その一人趙一曼（チャオイーマン）がいる。今その英雄としての生涯について述べることはできないが（『歴史を生きた女性たち』第3巻参照）、一九三六年八月二日処刑場に向かう彼女がまだ七歳の一人息子寧児（ニンアル）にあてた遺書には、「日本の支配に反対するたたかいに全身全霊を注い」だため「母親としての役割」を十分果たせなかったと詫び、「祖国のために犠牲になったことを忘れないでください」とある。息子が母の願い「偽満洲」の日本軍からの解放をみるのは九年後である。

またこの記念館の展示の結語部分に次のような文があった。「残忍な日本帝国主義の一四年にわたる東北人民への植民地支配を終わらせた…。歴史を振り返った時、共に戦う中での血で結ばれた中朝人民の深い友情を忘れない。また、東北人民と共に日夜を問わず日本と戦ったソ連赤軍も忘れない」。

私たちの満洲についての歴史認識は真に「植民地支配国」の加害のそれだろうか。朝鮮ゲリラやソ連軍の歴史的な役割など問わず「被害者」としての意識に止まっていないだろうか。

私は支配加害どころか、「良い」ことをしたと言われかねない「台湾」の植民地支配にさらに分け入った。その二重三重の加害の歴史事実と向き合うために。その一つがシンガポールの英軍戦犯裁判で死刑になった安田宗治（本名頼恩勤）だった。彼は『きけわだつみの声』所収の遺書で有名な木村久夫とともにインド洋カーニコバル島島民虐殺事件で訴えられた。（詳しくは拙著『忘れられた戦争責任』）

かつての戦争に多くの台湾人朝鮮人を戦場に駆り出しその命を奪っているのに、戦後恩給対象から外し、かつ戦犯に訴えられ罪に問われ刑に服したかつての植民地の人達に日本は何もしてない。頼は遺書で「公務」のために犠牲にと逝った。私は台湾に彼の遺族を探した。そして拙著の中国語訳を出してその犠牲の詳細を知らせて戦後日本の無責任を詫びた。

まだ、彼や木村を含めた日本軍の加害を詫びてないインド洋の島民たちへ、彼らが読める拙著の英訳を持参し、その犠牲者の墓参りが残っている。

教会での話

久保田　武美

小学校の時、私は田舎に住んでいて毎週、母と家族に連れられて教会へ行くのが楽しかった。教会には、やはり家族と共に来る中年で体格のよい男の人がいて、そのおじさんは母と懇意でよく話をしていた。

さて、教会の礼拝では賛美歌を歌うわけだが、そのおじさんは歌が下手なのである。下手というのはチョウシッパズレなのである。そのような人を笑ってはいけないのを小学生の私でも分かってはいたが、心の中では実におかしかった。その後、私は東京に移り教会には行っていない。そのおじさんがその後どうなったかも知らない。

私が大人になってから、ときどき母と昔話をするのだが、あるときたまたま私は母に「そういえば大きな声でチョウシッパズレで歌うおじさんがいて、面白かったね」と話したら、母は「そうだね、そうだったね、あの人は戦争で南の方に行ったとか言っていたが、それであるとき、よく分からないが皆殺しにしてこいとかいう命令が出たらしい。それでおじさんは、鉄砲を持って、とある呉服屋へ入った。そこには店のおばさんがいて、『何でも全部持っていっていいから殺さないで下さい』と懇願したらしいよ。しかし、命令なので鉄砲で無抵抗の店のおばさんを撃ったらしい。戦争が終わって帰国してから、殺さないでくれといって懇願した目つきを思い出すと、とてもつらくてしょうがない。それで、キリスト教の教会に来た、と言っていたよ」と私に話した。予想もしてなかったことを聞き、私は下手な歌を歌っていたおじさんを面白がっていた自分を恥じた。

戦争の時の悲惨な話は私の周囲には沢山あるが、戦争が話題になるときに私が最初に思い出すのはこの話である。

インパール作戦に参加した叔父の話——戦中戦後の我が家の話を含め

小泉　秀夫

インパール作戦

これは私が小学校の頃に聞いた話である。母の弟は大正六年生まれで、叔父さんになる。

彼が我家に来た時、夕食後などに時々戦地の話などをしていた。そうした時に実際に聞いて憶えているままなので、時間の順や文脈は切れ切れであるが、特にはっきりと記憶していることに限って記してみようと思う。

彼は、ビルマの戦地に行っていた。インパール作戦という言葉は聞いた記憶はないが、話の内容からすればインパール作戦への従軍である。「アラカン山脈（その山脈名はよく聞いた）」を越えて行き、そこは日本兵の白骨で「白骨街道*」と呼ばれたという話を記憶している。そのような言葉からも、彼の体験で強く残っていて人に話そうと思ったことは戦地で体験した悲惨な話であったようだ。といっても彼は一般的な意味で「戦争はよくない」ということは口にはしても、特に意識的に反戦意識が高いということではなかったように思う。そうした一般的な元兵士が話したことである。彼は最後は上等兵だったと聞いている。

＊「白骨街道」という呼び名は、多くの本に出てくるが、最近の『「戦場体験」を受け継ぐということ』（遠藤美幸著　高文研　二〇一四年一〇月）にも出てくる（P.75）。その本は中国雲南省拉孟全滅戦の証言の本である

が、その拉孟陣地に朝鮮人慰安婦がいたという話も出てくる。

彼の身長は当時で言えば平均的だったと思うが、がっしりした体格をしていた。それ故か、弾薬を運ぶ担当をしていたということだ。聞いた話では戦闘中、弾薬を運んでいったら砲兵が砲弾でやられて皆死んでいたということである。それを聞いた私は、砲弾を撃つ場の方が危険でそこに弾薬を運ぶ担当だったので助かったんだなと思ったことを記憶している。ある時は、任務で数人で走っていた時に、敵から狙われて、後ろを走っていた（より経験のある兵士）人が「撃った」と叫んで自分の前に出て伏せたので、自分も慌てて伏せた。その時、一瞬片方の手を下げるのが遅れ手首に傷を負ってしまった。攻撃が終わってみると自分の前に伏せてくれた人は顔に火傷を負い真っ赤になってしまっていた。それを聞いて私は前に出て伏せたのを不思議に思ったものだ。そのまま伏せればよかったのではと。また顔に火傷を負い真っ赤になったら酷い火傷で大変なのではないかと感じたものだった。

彼はそこで負った傷の手当で野戦病院に行ったが「馬の小便みたいな（彼の表現）」薄い薬をつけてもらっただけだったと話していた。また野戦病院（同じ所であるかどうかは記憶にない）が砲弾を受けて行ってみたら、犠牲になった看護婦さんの肉片が病院の壁に貼りついたいたという話もあった。

また、病気も流行っていて、彼も「アメーバ赤痢」に罹った。その時戦友に「自分は意識がなくてうわ言で『水、水』と言うかもしれないが、その時は必ず沸かした水を飲まして欲しい」と頼んだということだった。そういう戦友の助けと本人の意思もあってか、ともあれその「アメーバ赤痢」の犠牲にはならずにすんだ。

白骨街道

ある時、敵の捕虜（現地の人）を捕えて「日本軍についてどう思うか」という質問に「日本軍は怖くない。

ただ、戦死した日本兵のひとだま」が怖いと話していたという話も聞いた。

部隊の生き残りを集めて部隊を編成し、さらにその生き残りから編成していったという話も聞いた。それだけ犠牲を出した作戦だったということであろう。「アラカン山脈」の道は「白骨街道」と呼ばれたという話を書いたが、途中に小屋があるとそこは兵士の死体で一杯だったという話もあったように思う。

これからは敗戦となり捕虜の時の話である。捕虜になって嘗ての上官に会った時、彼が捕虜の仕事で何をしたいかと聞かれたので「料理番」をしたいと言って、その担当にしてもらったという話をしていた（これは私が成人してから思ったことであるが、捕虜の中でも以前の軍隊組織が存続していたということになるのだろう。シベリア抑留*の話でもよく聞く話である）。元々料理が好きだったのか、あるいはそこで覚えたからなのか、彼は料理が上手で、私の家に来ると、よく卵を産まなくなった鶏をつぶしてさばいてもらっていた。当時私は小学生で、戦後のものない時代だったので家でも鶏を大抵五羽くらい飼っていた。そして鶏をつぶす時とか、その羽をむしって、鍋でゆでて捌くなど、一連の作業を見ていて覚えている。

余談であるが、その鶏の歯ごたえと香ばしさは、ブロイラーの肉とは全く違う。サザエさんの漫画（姉妹社第八巻）にも登場している。

＊　シベリア抑留については、小学生の時、姉に連れられて「私はシベリアの捕虜だった」という映画を観たことを記憶している。映画ではあるが、日本に帰れると思っていたら汽車は反対方向に走っている、そこで雪の中に脱走した兵の姿、シベリアでの森林の伐採作業と作業中での事故死、食料を巡る争い、故郷の歌を歌ってソ連兵から懲罰を受け真冬の夜に裸で拘束された場面…そして帰還を迎え、あくまでソ連に反抗した一人と一番迎合した一人が残された場面など、今でもよく憶えている。

また父の弟（私の叔父になる）はガダルカナルで戦死している。ずっと仏壇に銃を持ったその叔父の写真

と一通のはがきがあったが、私も結婚して家を離れたりしてその行方はわからなくなってしまった。戦後、叔母は再婚していないし従姉は私より苦労している。

疎　開

これからは疎開先の話である。私は東京の蒲田で生まれたということであるが、昭和一九年四月に父の出身である福島中通りに疎開した。姉は当時小学校五年で疎開先の小学校に通った。父は若い頃肋膜を患ってレントゲンで痕があるということで兵役には取られなかった。母親は竹やり訓練や油をとるために松の根っこ堀り等の作業があったが、そんなことで勝てるわけはないなと思っていたと話していた*。庶民の感覚的な判断であろう。そうした訓練や資源の調達を国民にさせながら戦争を継続できる・すると判断・決定していく政府の判断力が問われてしかるべきだろう。それによってどれだけ助かる命が失われたことだろうか。多くの犠牲は戦争末期に集中している。

これも母の話である。列車に乗っていた時、ある駅で多くの兵士がどやどやと乗り込もうとしていた。その時、将校と思われる人が「貴様ら乗るなー」と叫んで乗らせなかったという。その話をしながら乗れなかった兵隊たちは門限に間に合わなくて後で酷い罰を受けるだろうにと話していた。日本軍の理不尽な体質が現れた一場面なのだろう。

＊　そんな母だが、「敗戦の水を飲むな」という話もしていた。「生きて虜囚の辱めを受けず」という戦陣訓につながる話にならないとも限らないが、不思議と私の心に残っている言葉である。人間としてのプライドを忘れるなということを伝えたかったのだろうと思っている。一方、サンフランシスコ講和条約の後（当時、国立に住んでいて隣に米軍の立川基地があった。）、外国軍がまだいる内は、独立といっても本当の独立ではないと

いうような話もしていた。

空襲警報がなると私は押入れからおんぶ紐を出してきたという話や、少し離れた地方都市が空襲を受けて疎開地の山の上から赤々と燃えている様子が見えたという話を姉からも聞いている。

疎開中、食糧難で近くの神社の銀杏取りが大切だったとの話―私を座らせていてもすぐひっくり返るのでゆっくり銀杏取りができなかったとか、他の人と競争で朝早く取りに行ったという話。私が栄養失調になったこと、医者からはあまりものを食べさせてはいけないと言われていたが疑問に思った母が町の医者にいったら、もう栄養失調は治っていると言われたという話。―私自身、小学生になって高校くらいまで、栄養失調にならなければもう少し背が伸びたのではいう思いが残っていた―。

母親が買い出しで両手に荷物を持って凍った坂道を降りている時に滑って転んで大変だった等という苦労話も聞かされた。また、いつも親切にしてくれる農家（黒羽さんという方だったと記憶している）があったという話（母は戦後何年もその農家へ何か品物を贈っていたように思う）。

父が東京から帰って来た時、私が暫くは父を警戒して近寄らなかったという話。配給だけでは足りず闇の食料を買うと、父からは「国賊だ、非国民だ」と言われ、暫く配給だけで食事を出していたら、それからは父もそういうことを言わなくなったなどという話も母からよく聞かされた。一般に女性の方がずっと現実的で柔軟であるということであろう。

「国家のために死ぬ」という論理納得できず――父の遺した考察、今よみがえる

小島　祥一

父の手記

過去の戦争の記憶について、原稿を募集されているとのご連絡をいただきました。何かのご参考になればと思い、以下のように書いてみました。

私の父小島穀男（こじまのぶお）は一九九三年に亡くなりましたが、没後、一九四六年に書いた手記が出てきました。大学で造船を専攻したので、一九四三年に、海軍技術将校として召集され、インドネシアのセレベス島マカッサルで造船所の監督が任務でした。マッカーサーがニューギニヤからフィリピンに向かったため、生き延びて、一年の捕虜の後帰ってきました。復員直後に書いたものですが、押し入れに眠ったままでした。

生前はほとんど戦争の話をすることはありませんでしたが、官僚の私が「今日は各省連絡会議がある」と何気なく話したとき、「俺もマカッサルで各省連絡会議をやっていたが、一〇人の出席者のうち八人が絞首刑になってしまった」とつぶやいたのが、うちの家族の記憶にも鮮明に残っています。BC級戦犯は、捕虜虐待、現地人虐待への追及が厳しく、父は「俺は捕虜、現地人は使わなかった」と言っていたので、生きて帰ったのでしょう。

手記「南方生活の憶い出」は、文庫本一冊ぐらいの長さで、具体的な体験談になっており、一周忌に印刷して関係者に配りました。その中で一章だけ、「生への執着」という超哲学的な文章があり、「国家の安全のために、自分は戦争に出されて、死なねばならない」ということはどうしても納得出来なかった、と述べた部分があります。

そのまま、今の安倍政権の「安保法案は国民の平和と安全のためであり、戦争法案ではない」という詭弁、「国民は国家に従う義務がある」と書きまくる憲法改悪案、「戦前戦中の日本は正しかった」という歴史修正主義への反論になっています。家族の間では、「今の世の中のために書いたみたいだね」と話題になっています。長いので、以下に主要部分を抜書きします。

一九四六年に、三一歳の青年技術将校が復員直後に書いたものとして、お読みください。

＊　＊　＊　＊

「生への執着」

小島穀男（こじまのぶお）

一九一五年生まれ

一九四二～四五年　海軍技術将校（セレベス島）、一九四六年　捕虜一年の後復員、手記「南方生活の憶い出」執筆

一九九三年没、小島祥一原稿入手、関係者配布

死の諦観に近付いてついにそれに達することが出来なかった。近付くたびに生への執着が自分を後に引き

戻した。煩悩の絆はついに断ち切ることが出来ない。

我々は国家のために死ぬのだそうである。国家の安全のために犠牲になるのだそうである。

国家とは何ぞや。　それは一つの団体に過ぎない。この団体は何ゆえに生じたのであるか。言うまでもなく、各個人の生活を安全に、幸福ならしめんとして生じたに過ぎない。そうして個人の幸福の害されざる限り、国家はあくまで生活の機関であった。しかも国家が国家としての独立性を持って人間の生活から脱出し来るや、一個厳然たる大機関となった。人間は今やこの大機関の下に、奴隷の如く服従しなければならない。

そうして宗教もこれをたたえ、道徳もこれを称し、哲学はこれを理論化する。かくして国家は最高の存在として、最高の価値を有するに至る。至高なる哲学的存在は天にある。一個の人間はいやしい地上の虫けらに過ぎない。その幸福を蹂躙することは何であるか、それが徳である。かくしてついに個人の幸福はどこかに飛んでいってしまったのである。

そうして一個人、すなわちすべての人間は国家の奴隷となってしまった。死ぬべきものは国家に非ずして個人である。犠牲となるものはまた国家に非ずして個人である。そうして宗教的熱狂とともに戦争が開かれ、国家の安全のために、数十万、数百万の人間が死なねばならぬのである。

死とは何ぞや。　宗教は種々の形で死後の幸福を称し、哲学は種々の形で死を理論づける。しかし大多数の人間にとってそれは、観念上の遊戯に過ぎない。賢人や哲学者は無智なる者を憐れむ。ささやかな理智が彼らに恵まれた。彼らは人生の目的を求め、人生の帰結を探らんとする。そのことの不可能なるが故に、自ら失望せざるを得ない。ある者は自らの論理に迷わされ、ある者は観念に囚われ、得たりと信ずるところの結論は、ついに彼自身を慰めるべき一つの迷いに過ぎなかった。それが彼らの宗教であり、哲学である。

かくの如くにして、賢人と哲学者はついに自己満足のみで終わらざるを得ない。人生はついに彼らの考え

る外にあった。人生の本体とか、究極の目的とかは人間の思議以外にある。すべてのそれに対する説教者こそ詐偽者なのである。

生活は一つの存在である。それは具体的な生活の意味であって、抽象的な高遠な理想の如きものではない。生活の欲するところは自己目的である。日常の生活である。日常の生活さえ幸福であれば、何が何を要求しよう。

生活が不幸に陥りかけたのは、確かに理智のお蔭である。理智は生活に幸福を与えると同時に大きな不幸を与えた。

理智はそのささやかなる力をもって自然を究明したと信じた。それが宗教であり、芸術であり、政治であり、経済であった。それらが生じたのは、生活をより良くし生活をより幸福にするためにのみ生じたのである。

政治は決して支配者の支配欲を満たすためのものではないはずである。そうなれば堕落した政治である。道徳は生活をより幸福ならしむべく、人間がその経験と理性から生んだ一つの方法である。人間を縛るために生じたものではない。

人間が人間の道具として生み出した種々の機関なり制度なりが、独立して特有な進化を続ける。人間は自らがその機関、制度の主であると信じていた。しかしいつの間にか、実はその奴隷になってしまった。人間がその生活のために作った機関である国家はついに人間を奴隷としてしまって、国家のために死ぬことさえも要求するに至ったのである。

この機関、制度の下で、理性は死に対して一つの妥当性を与える。しかし死はやはり不幸である。死は人間の二大本能である種属維持と自己保存に反するのである。

戦争中、死は種々の形で我々に迫った。空襲によるそれは極めてImpulsivelyである。戦争の悲局によって

生ずるそれは極めてStatisticallyである。

私はそのたびに早く死の諦観に達せんと焦った。しかもついに生への執着を断ち切ることは出来なかった。外見はいかにも死を覚悟しているような顔をしていた。偉そうな顔をして部下に訓示したことも何回もある。自ら進んで危険な地に入っていったこともある。しかしそれらの時の自分の心の底を眺めて見ると、いずれも一種の虚栄心に過ぎないのである。本心は常に生きたい、生きたい、生きて今一度内地に帰りたいと思っていたことは偽らざる告白である。

大和魂とは何ぞや。私はあえて言う。大和魂とは虚栄心と自暴自棄の結合せるものである。しかもかかる無意味なる結合をなさしめたるものは、我々および我々の父祖が、自己の生活の幸福のために作った日本という国家である。